モントリオールへの道

IHF（国際ハンドボール連盟）は、予想どおり10月イタリアで開いた総会席上、これまで準またはは仮加盟であったアジアのホンコン、インド、サウジアラビア、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の4ケ国を正式加盟国として承認（詳報4頁）した。

日本協会・荒川理事長のいうように「アジアの加盟国が増えるのは結構なこと」だが、日本にとって、それだけ難関が増えるわけで、頂点強化対策を根本的に考えなおす必要も生じそうだ。

今回の総会決定で、IHFに籍を置くアジアの国は、日本を含め12ケ国の〝大世帯〟となった。これまで、世界選手権を前にアジア予選が実際に開かれたことは1回もなく、ミュンヘンオリンピック前にイスラエル韓国、日本で予選したのが唯一の例である。

今後は、このような〝簡単なこと〟では済まされない。

現実に、来年の第6回世界女子選手権にアジアから出場を申し込んだのは日本のほか韓国、台湾、インド、イスラエルと5ケ国を数えている（詳報4頁）。

ところが、日本ハンドボール界の一部から、あまり、この現実を切迫して受けとめていないようなフシを感じとれるのは拙い。

たしかに、日本協会の集めている情報を総合、分析すると、諸国と日本のレベル差はいぜんあるようであり、〝危機感〟は少いのだが、それはあくまで現時点でのこと。

時が進めば各国の当座の目標は「世界」よりも「日本」に置かれるであろうし、新しいスポーツだけに一気に勢いへ乗ることが考えられる。

そうなってから、慌てたのでは遅い。取り返しさえつかないだろう。

テヘランのアジア大会で、日本スポーツ界の得た最大の教訓は「オリンピックや世界選手権ばかりではなく、アジアにも焦点を合わせた〝対策〟の必要性」（JOCのアジア大会反省会に出席した日本協会・渡辺（慶）技術部長の話）だったそうだ。

ハンドボールも例外ではなくなろう。予選会もつねに日本で開けるとは限らないし、むしろ乗りこみが多くなると思う。

オリンピックへの道はますます険しく、目前のモントリオールへこぎつけるまでにもかなりの苦労が待ち構えている。

市民ハンドボールの芽

市民ハンドボールの楽しさは、固ぐるしさから脱け出せることだろう。

特に、奔放なまでに競技規則をアレンヂできる楽しさは、公式大会では絶対に味はえぬものだ。

例えば、――審判は一人（それも途中から二人になったりする）試合時間が15分ハーフなどというのは序の口、筆者が東京・代々木の国立競技場体育館横のコートで見た〝試合〟は、なんとフリースローラインを省略しての熱戦だった。

最近、多くなっている、といわれるのは、男子が女子用ボールを使うケースだ。スピードがつきすぎて危い、という声もあるが、それは〝現役〟〝第一線〟の話。

むしろ初心者やオールドボーイズには、ハンドボールの真随に近づけて楽しい要素が増えてくる。

男子の中に女子加入OKという思い切った例もある。本誌でも一度紹介された岐阜・大垣市の水曜リーグだ。

考えてみれば、ハンドボールほど、ミックスド・マッチ（混合）をしやすいボールゲームはほかにない。

バレーボールにしても、バスケットボールにしても、男女の体格差でかなりムリが生じる。

その点、ハンドボールは条件に差が少ない。

日本ビクター（茨城）の池田夫妻に代表されるハンドボールカップルも聞くところによると多いそうである。ミックスを大いに奨励しておこう。

ところで、こうした市民ハンドボールの傾向に眉をしかめる人がいるのは〝不思議な話〟である。

もちろん、スポーツにはルールが必要だし、それが競技者、愛好者の安全を守ることにつながるのだが、すべて「日本協会競技規則」でなくてはならぬという押しつけがましさはとんでもないことだ。

「女子のボールを使うなんてハンドボールじゃないよ」、「フリースローラインがない？ ハンドボールじゃないよ」などと真顔で口をとがらせる。

プレーしている連中は、立派にハンドボールを楽しんでいるのだ。よけいなお節介というものだろう。

むしろ、「草ハンドボール」出現は拍手をもって迎えられるべきなのだ。

わが町、わがクラブの特別ルールを是非この欄へ送って下さい。苦々しい顔など絶対にいたしませんから……。

「ハンドボール」

49年11月号（第125号）目次

【表紙写真】東ドイツ来日の余韻はいぜん日本ハンドボール界に残っている。技巧派ピーチエのポストプレー（9月8日・大阪市中央体育館、対全日本）

撮影・光島磯雄

男女ナショナルチーム（49年度）決まる

◇日本協会・渡辺(慶)技術部長と男女全日本コーチングスタッフは「49年度ナショナルチーム」の編成を急いでいたが、このほど作業を完了、各機関を通したあと、10月13日の全国評議員会、同理事会に名簿を提出、承認をうけた。7月のコーチングスタッフ決定につづき、日本協会の〝世界〟を目指す体勢は再び整ったわけで、今後の成果に大きな期待が集っている。男子はABともモントリオール・オリンピック第1次候補選手、女子は来冬の第6回世界選手権候補選手となる。◇

即戦力……「経験」重視の起用（男子）

モントリオール（51年7月）まであと2年を切ったばかりか、アジア予選が早ければ来秋11月開かれるのでは、という説もあるだけに、強化スタッフは〝即戦力〟中心の人選をみせた。

48年度ナショナルにもれていた飯田、有永、新実、佐々木（いずれもミュンヘンオリンピック代表）をカムバックさせたのもその一例であり、Aチームに登用された学生トリオも、今春の世界選手権代表というキャリアの持ち主。そのほかの選手も、負傷で東ドイツ戦出場を見送られた柴田（GK）を除き、いちどは全日本のユニホームを着た〝経験者〟。厳密な意味での新人は一人もいない編成となっている。

なかでも木野、飯田がついにナショナルプレイヤーとして9年目を迎えようとしているのが光る。

この両ベテランのほかは、ナンバーワン・藤中をはじめ中井、佐藤と、日本が世界に誇るキャリア豊かなアタッカーが並んだ。

クラブチームに属しながら、東ドイツ戦で相変らず豪快な攻撃を見せた左腕・有永（東京海上火災）の復帰も注目してよい。

菊池、村田、蒲生は将来の全日本を背負うと早くから期待されていたホープたち。国際試合の難しさにも慣れ、これからは一試合ごとに〝彼らの時代〟へと近づいていくことになろう。

速攻の主役として松原がB（48年度）から上って来たのも目立つ。

GKは本田（大阪初芝高教員）が頑張る。GKで、初の公式国際試合50回出場も目前だ。

大型・斉藤は、高校時代（秋田湯沢高）野球選手で、ハンドボール歴はまだ2年半、いかにその素質を買われているかが判ろう。斉藤にとってはむしろこれからが難関、精進して欲しい。

Bチームは巧者が並んだ。新実（左腕）花輪、佐々木はそろって個性のある攻撃力をもち、竹野監督の狙う「層の厚い全日本」の一翼をになう選手である。

名手退陣……多数の新進を登用（女子）

男子と対照的に、半数以上が全日本初選出というフレッシュな顔触れになった。

昨冬の世界選手権終了後、垂水、小原（いずれも大洋デパート）が第一線を退き、牧野（東京重機）はヒザの故障をこじらせ戦列をはなれ、三毛（田村紡）も、体力的限界を理由に、今回から全日本入りを辞退したため、大幅な交替を余儀なくされたものである。

このためコーチングスタッフは9月、栃木で30名によるセレクション・キャンプを行い、多角的なチェックを試みて別表のような17名を決めた。

目標におかれている世界選手権（50年12月、ソビエト）は、モントリオールにもつながる重要な大会だけに、チームの中心として、女子選手で初めての世界選手権3回出場を目指す島田、古佐原のほか、和田（GK、元大崎電気）、鳥居、山下、蔵田と昨冬の遠征組が引きつづいて名を連ねているのは、当然といえる。

各選手とも、ますますその技に磨きをかけており、今度こそ、世界の上位（注＝オリンピック出場権は4位まで）へという気力にあふれている。

初めて起用された選手たちも素質に恵まれ、これからの指導しだいでは、かつてない多彩なナショナルチームを編成することが可能。

井監督らコーチングスタッフにとっては、苦労も多いだろうが、楽しみも大きい、といったところであろう。

GKは、昨冬の遠征で和田がすっかり自信をつけ小原の穴を埋めている。鈴木、久保も安定感では申し分なく、特に、鈴木の長身は魅力。

FPは大場、有賀の両左腕、菊地、松下と各チームのホープを並べた。これまでも、全日本の候補にあがっていた選手たちで、いっそうの飛躍を望みたい。

学生界から唯一人選ばれた坂本は、長身を活かした豪快な攻撃力を誇る。大型アタッカーに人を欠

津川、穂積、平野（左右両利き）、斉藤（左腕）、柳川は若さにあふれ、この5選手のリストアップが、今回のメンバーを新鮮なものに映し出す大きな役割を果している。

津川、穂積は社会人球界にも馴れ、進境いちぢるしい。平野は自衛隊が生んだ初のナショナルプレイヤー。斉藤はユニークな攻撃力をもつ新鋭で、属望されている。柳川は、今春の世界選手権で、その実力をすでに評価されており、速攻戦力として欠かせない。

GKは学生界一と定評の柴田。専門家たちは、彼が東ドイツ戦に負傷欠場したことを惜しがっており、その真価が、今後どう発揮されるか見守りたい。

ところで今回の選考は、ここ数年間の日本協会頂点強化の集大成といえる。つまりミュンヘン（47年）第8回世界選手権（49年）を目標にねりあげた第一線選手を網ら、その中の21名をピックアップしたものなのだ。モントリオールまで、あと2～3回の手直しは予想され、新進の登場を待つかのようにBは3名の欠員がある。A～Bの入れ替えはひんぱんであろうし、今回の21名も「50年度ナショナル」としての保証はない。

く全日本としては、どうしても成長して欲しい選手である。

ハイティーン4人が選ばれたのも話題。

加藤は〝2年生〟だが、その他の3人は、いずれも今春、社会人になったばかり。早くもホームチームでレギュラーの位置を確保しているあたりは、その技倆がなみなみならぬものであることを感じさせ、気の早い報道関係者は「これで6年後のオリンピックの柱は建ったようなものではないですか」というほど。

女子のナショナルチームは、これまで、キャリアを重視、事実、よほど経験がないとビッグゲームには通用しないといわれていたが、コーチングスタッフが、いわゆる中堅層をはずし、思い切って若手を加えたのは、ようやく、頂点強化が一つのレールに乗って走り出そうとしていることを示すものである。

男子の場合は、ヤング（22才以下）－B－Aという路線の確立が成りつつあり、実績をあげているが、女子は、全日本そのものの年令が低いため、ヤングの編成が難しく、有望な新人は即全日本に加えるよう内外から望まれていた。しかし、どうしても、即戦力ということに目が注がれ、踏み切れずにいたものだ。今回の選考姿勢は評価されてよい。

なお、男子同よう、今後も選手の追加が行われることになっており、井監督は、高校界のトップを中心に、ここでも新しい力、若い力の登用を積極化したい意向である。

昭和49年度男子ナショナルチーム

（モントリオールオリンピック第1次候補選手）

【Aチーム　12名】

	氏名	所属	年令	身長	全日本入り	出場数
GK	本田　洋	大阪イーグルス	27才	179cm	44年2月	㊺
	斉藤将一郎	日体大	21〃	187	49年1月	④
FP	木野　実	湧永薬品	28〃	181	41年9月	(54)
	飯田　誠行	大崎電気	28〃	187	△41年9月	㊶
	藤中　憲二	大同製鋼	26〃	178	44年2月	㉞
	中井　武三	大同製鋼	25〃	180	44年2月	㉜
	有永　修二	大阪福島ク	25〃	187	△44年2月	㉔
	佐藤　要二	本田技研	24〃	179	47年3月	⑯
	松原　光三	大同製鋼	24〃	180	49年1月	①
	菊池　悟	早大	22〃	185	48年8月	⑯
	村田　幸男	法大	20〃	178	49年1月	⑬
	蒲生　晴明	中大	20〃	192	48年8月	⑮

【Bチーム　9名】

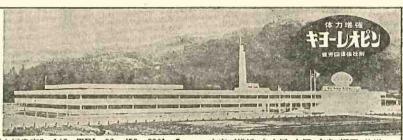
	氏名	所属	年令	身長	全日本入り	出場数
GK	柴田　正幸	法大	21才	184cm	49年1月	・
FP	新実　俊夫	本田技研	25〃	181	△44年9月	⑪
	花輪　博	大同製鋼	24〃	177	45年4月	⑬
	佐々木健一	三景	24〃	170	△47年3月	⑧
	津川　昭	湧永薬品	22〃	180	49年1月	①
	穂積　豊彦	湧永薬品	22〃	180	49年1月	①
	平野　稔	海上下総	21〃	180	49年8月	・
	斉藤　幸司	日体大	20〃	175	49年1月	・
	柳川　実	大同製鋼	20〃	175	49年1月	⑩

・右欄の年月は全日本入り初時期を示す。
・△印は48年度ナショナルにもれ，今回カムバックを示す。
・○内数字は公式国際試合出場数。

昭和49年度女子ナショナルチーム

（第6回世界女子選手権第1次候補選手）

	氏名	所属	年令	身長	全日本入り	出場数
GK	和田　祥子	立石電機	22才	167cm	47年10月	⑩
	鈴木はる子	日本ビクター	21〃	171	48年7月	・
	久保　徳子	田村紡	21〃	161	48年7月	・
FP	島田　夏枝	立石電機	24〃	163	45年12月	⑱
	古佐原ひろ子	東京重機	23〃	152	45年12月	⑱
	蔵田　照美	立石電機	23〃	162	45年12月	⑩
	鳥居　君子	ブラザー工業	22〃	163	47年10月	⑩
	山下恵美子	立石電機	21〃	160	48年7月	⑩
	坂本　陽子	日体大	21〃	168	初	
	菊地　春美	東京重機	21〃	162	初	
	有賀とも子	東北ムネカタ	21〃	165	初	
	松下　仁美	田村紡	20〃	163	初	
	大場　裕子	大崎電気	20〃	164	初	
	加藤美起子	日本ビクター	19〃	164	初	
	穂積美保子	日本ビクター	19〃	168	初	
	河田　栄子	田村紡	19〃	167	初	
	紀野奈々美	立石電機	18〃	165	初	

・右欄の年月は全日本入り初時期を示す。○は男子に同じ

オリンピック（女子）「3大陸代表」承認

～世界女子は5カ国でアジア予選～

北朝鮮、インドなどの正式加盟決まる

IHF総会

注目のIHF（国際ハンドボール連盟）第15回通常総会が、10月4、5の両日イタリア・ジェスロ市観光会議所で開かれ、日本からIHF理事・渡辺和美（日本協会副会長）、荒川清美（同理事長）の両氏が出席した。

総会は、オリンピック後〝世界のスポーツ〟として大きな飛躍を遂げているムードを反映して、かつてない熱のこもった論議がつづき、多くの案件に〝結論〟を打ち出した。主な議決事項次の通り。

①日本、アメリカなどが提案した「モントリオールオリンピック女子参加6カ国の配分を、来冬の世界選手権上位4カ国、開催国（カナダ）のほか、アジア・アメリカ・アフリカ3大陸代表1カ国とする」は激論のあと投票にもちこまれ、日本などの提案が多数の支持を得て採択された。

②日本、アメリカなどが提案した「アジア・アメリカ・アフリカ大陸を代表する理事は、自動的に執行部（常務理事会）のスタッフとなる」は検討の結果、却下。

③皮張り以外の、例えばプラスチック（合成樹脂）ボールもIHF検定～公認～球とする方向へ進む。

④IHF公認審判員の年令は28～50才とする。

⑤イスラエルのヨーロッパカップ（男女）参加は、激論の末、投票となり、14－9で「これまでどおり承認」に決定

⑥来冬の第6回世界女子選手権はエントリーが12カ国を越えたため大陸予選を行う。アジア大陸は日本、韓国、台湾をAグループ、イスラエル、インドをBグループに分けてまず第1次予選、両グループの勝者同士でアジア大陸代表決定戦（代表は1カ国）を争う。レフェリーはIHFが派遣。

⑦モントリオールオリンピック女子の大陸代表は、モントリオール大会（51年7月）の1週または2週前にカナダまたはアメリカで予選を行うよう準備する。

なお、新たにIHF加盟国として9カ国が承認され、このうちアジア関係は朝鮮民主々義人民共和国（北朝鮮）、インド、ホンコン、サウジアラビアの4カ国（注・イラクは保留）。これでIHF加盟国は63カ国となり、アジア地域は一挙に12カ国と増えた。次回は明後年11月ポルトガルで開く。

渡辺理事の活躍実る

五輪女子の「代表」承認

【解説】日本にとって最大の朗報はモントリオールオリンピック女子の出場国に「3大陸代表」が認められたことであろう。

モントリオール大会を来冬ソビエトで開かれる第6回世界女子選手権上位5カ国と開催国（カナダ）の計6カ国によって行うとするIHF案は、日本の現有勢力から推すと、オリンピックをかなり遠いところへ押しやる〝宣告〟でもあった。

もちろん、全日本女子の頂点強化はこれまでになく急ピッチで進み、有望新人も多いのだが、1年後の大会でベストファイブに食いこむ可能性は、東欧勢の充実を知る時、残念ながらうすかったのである。

執行部も、この現状を察して男子同ようアジア大陸代表を送りこむ策をねっていたが、オリンピック女子そのものが6カ国という狭き門であったため活路を見出せず

そこへ渡辺副会長（IHF理事）から「3大陸の協同提案」という方法が持ち出され、IHFへ提案手続きをとったものだ（＝本誌119号参照）

しかし、IHF原案を支持する力は圧倒的とみられ、執行部も日本案には不賛成と伝えられていた

それを、採用へ持ちこめたのは渡辺理事とビューニング理事（アメリカ）の根廻しの巧さ、アフリカ諸国の賛成票によるものだ。ヨーロッパ偏向のIHFで、初めて他大陸がおさめた〝勝利〟ともいえる出来事である。

なお、3大陸代表決定戦は、本番直前の51年7月モントリオールまたはアメリカで行われることに内定した。これは、他のボールゲームでよく用いられる方法、例えば、東京オリンピック時、大会一週前に横浜市でバスケットボールが全世界1区の予選を行ったことを記憶されている読者も居られるだろう。

3大陸代表の前段階として、各大陸の予選を改めて行うのかどうかは不明、そうなった場合は朝鮮民主々義人民共和国らの新参加も予想される。

来冬の世界女子に申しこんだのは24ケ国（ヨーロッパ16、アメリカ2、アフリカ1、アジア5）だった。

日本製ボールにもチャンス

IHF総会にボールの問題が持ち出されたのは久しぶり。「プラスチックボールというのは日本製を指すようだ」と荒川理事長はいっているが、事実〝モルテン〟など最近日本製ボールの海外進出が目立っている。〝アデイダス〟（皮製、手ぬい）が圧倒的だったIHFに、もし日本をはじめ他のボールメーカーの製品が登用されるとすれば、これも画期的なこと。

ヨーロッパだけですべてを運んできたIHFが、ミュンヘン前後から、その視野を拡げ、グローバルなスポーツへ積極的に踏み出しているのは好ましい傾向といってよい。

しかし、要（かなめ）の部分はいぜん、がっちりおさえているようで、それが、渡辺理事の熱弁も空しく「大陸選出理事の執行部入り」否決に示されている。

IHF内の形勢微妙に

加盟国増加もめざましい。今回承認されたのはシプルス、ホンコ

IHF,「アジア連盟」組織に難色

アジア競技大会採用（本誌前号既報）に関連して、アジアの一部の国がクウェートに本部を置いてAHF（アジアハンドボール連盟）の結成を行うよう準備しているが、事務局長に決まったS・A・ハッサン氏（パキスタン）が、10月4日からイタリアでのIHF（国際ハンドボール連盟）総会へ姿を見せ、AHFを正式に認めるようIHFに対し要請した。

AHF結成は、日本同ようIHFもまったく知らぬ間のできごとで、IHFは、この申し出を、未加盟国であるパキスタンが持ちこんだことと、IHF未加盟国が加っているなどを理由に審議できないと、事実上「未公認」の判断を示した。

この姿勢を不満とするハッサン氏は激しく食い下り結局、IHF総会外の会合として、10月3、4日この場に集っていた荒川清美氏（日本）をはじめイスラエル、韓国、台湾、クウェート、レバノン、ヨルダン、インドなどアジア諸国の代表と、IHF側からヒョークベルグ会長(スウェーデン)、リンケンバーガー事務総長(西ドイツ)、渡辺和美理事(日本)らが、長時間にわたって話し合った。

しかし、議論はあくまで平行線、一時は、クウェート（IHF加盟国）が、ハッサン氏に代ってこの問題を、IHFの議場へ提出する動きもあったがIHF側の態度は崩れず、渡辺理事を中心に改めてアジアの問題として協議の場をもつことでしめくくった。

10月15日帰国した渡辺理事は「大陸別連盟はIHFの加盟国だけで組織されなければならない。来春早々にも私がアジア各国を歴訪して、ルールにあったAHFを結成するようにしたい」と話している。

▽

一方、AHFは9月28日付（注・日本協会は10月5日受信）で本部(クウェート)からアジア各国に対し、加盟申込み手続きを促す文書と9条にわたる「AHF規約」を送り出し、本格的な動きを見せはじめた。

日本協会では、10月12日の月例常務理事会で同文書、規約が紹介されたが、IHFが認めぬ組織への加盟には慎重を望む声が多く、成り行きを見守ることとなった。

来春早々に世界女子のアジア予選(別掲)、さらに来年度内にモントリオール男子予選が義務づけられており、アジアハンドボール界の前途は波乱含みだ。

ン、インド、ナイジェリア、ファロー諸島、朝鮮民主々義人民共和国(北朝鮮)、サウジアラビア、タンザニア、キューバの9カ国で、これでIHFの世帯は63カ国とふくれた。

バスケットボール(IBBA)の148カ国、サッカー（FIFA）の147カ国などに比べれば、まだまだ〝若い〟が、この10年間に27カ国増という成長は、かつてない伸び率である。

注目されるのは、本山ともいうべきヨーロッパで未加盟国が、あとモロッコ(加盟申請中)、ギリシア、トルコぐらいを残すだけなのに対し、アジア、アメリカ、アフリカ地域はすべて「これから」なことだ。〝3大陸〟は総会ごとに勢力を増やすであろうし、それがIHF機構そのものを、大きくゆさぶることにつながると想われる。

荒川理事長も「6年前のアムステルダム総会の時とは、会議場のムードが一変した。議論は熱をおび特にアフリカの抬頭は、もはやIHFが、ヨーロッパファミリーだけで運行できぬことを示唆している」と述べている。

一部で予想された「中国招へい」はまったく議題とならず、ささやかれさえしなかったそうである。しかし、日本協会内ではこの問題が表面へ出てくるのは「時間の問題」とみている。

技術委の専門化強まる

こうしたなかで、アジア所属のイスラエルがヨーロッパカップにこれまでどおり、代表を送れることになったのは、ヨーロッパの足なみがバラツキはじめたのを嗅はすものとして注目される。

ヨーロッパカップ出場に固執するイスラエルに対し、一部のヨーロッパ国は冷ややかな態度を示したが、一方ではイスラエルのアピールを全面的にバックアップする国もあり、今総会で屈指の大議論になった。

このほか、各議題でフランスをはじめとする反体制派の鋭い論弾がとんだといわれ、荒川理事長は「ヨーロッパも復雑」という。

なお、国際審判員の年令が28才～50才に限定されたほか、来年、ポーランドで第15回IHFレフェリー講習会の開催が決まった。

また、競技規則などは、今後は総会議題とせず、各国の提案を技術委員会（TC）が審議、総会に承認だけを求めることに改められた。

一九七八（昭53）年に予定される第9回男子、第7回女子の各世界選手権開催地は決まらなかった一九七七（昭52）年の第1回ユースも、もうひとつ関心が集らず、宙に浮きそうな実行きだ。（杉山）

世界女子予選　来春韓国で開催か

IHF総会に出席中の日本協会・荒川清美理事長は、第6回世界女子選手権のアジア予選をIHFから義務づけられたため、現地で渡辺IHF理事をまじえて関係各国代表者と会い、その方法について話しあった。その結果、

①アジアからエントリーしている5ケ国をA、Bグループに分け、その勝者同士でアジア代表を決める、とするIHFの提案を了承＝前頁参照

②A、B両グループとも50年2月16日までに予選を終了、代表決定戦は3月10～16日の間に2試合を行う。

③Aグループ（日、韓、台）は2月10～16日韓国で2回総当りによって行うのを第1案とする。

の3件を申し合せた。しかし、③については韓国からの総会出席者が、駐イタリア韓国大使館の関秀弘1等書記官であったため〝結論〟が出ず、11月中旬までに韓国協会から日本、台湾へ連絡されることとなった。代表決定戦の場所は一切白紙。

アジア大会正式採用の〝波紋〟

日本協会、体質改善で対処へ

JOC（日本オリンピック委員会）は、9月24日東京で開いた常任委員会で、テヘランにおけるAGF（アジア競技連盟）評議員会で、ハンドボールが、アジア競技大会の19番目の競技として追加されたことを確認した。

アジアにおいて「日本のハンドボール」を誇示する機会がついにやって来たと喜びたいのだが……。

本誌既報のとおり、アジア大会にハンドボールが追加されたことが公式に確認されたわけである。

JOC常任委員会後、AGF評議員会に出席した竹田恒徳AGF第一副会長（注＝今後はAGF名誉副会長）は、日本協会・荒川清美理事長にも、この旨を伝えたが、これは、日本協会が受けた、今回の問題の最初の〝公式連絡〟だった。

アジア大会における実施競技については、オリンピック同よう19の競技のなかから、開催国（都市）が選択することになっており、ハンドボールが4年毎に必らず行われるとは限らない。

さしあたり、4年後、イスラマバード（パキスタン）で行われる第8回大会でどう扱われるかが注目されるわけで、消息通は、今回の音頭とりとなったクウェートとパキスタンによってアジアハンドボール連盟の結成が準備されたことや、イスラマバード大会は、中国の援助が絶大であり、この2点から、採用(男女は不明としても)を有力とみている。

〝国際〟体制の確立が必要

ところで、アジア大会採用やIHF（国際ハンドボール連盟）アジア加盟国の増加などで日本協会の国際行事は、ますます多繁となりそう。斯界の体質そのものを改善しない限り、すべてを完全に乗り切れないというみかたが強まってきた。

これまで、日本協会の国際渉外は対IHFのほか、来日チームの受け入れ交渉、日本チームの遠征手つづきといった事務的なものが主で担当役員も一～二名、48年度の機構簡素化では、それまでの国際部を総務企画部に吸収させてしまったほどだ。

しかし、今後は、このような感覚では、とてもやっていけない。荒川理事長も協会内部の体制固めを痛感、国際部の復活と拡充を心づもりしている。

一転、ピンチの不安はらむ

アジアにおける大会、試合の増加によって、競技運営、技術的な指導のためにも、大会組織自体への参画が必要であろう。

特に、レフェリーについては国際キャリアからも、日本がイニシアチブを握るべきだ、という声が圧倒的で、審判部内の〝国際化〟も急務といえそうである。

毎度のことながら、飛躍のたびに、切実な悩みとなるのが台所。

加盟金、登録金は〝還元〟の建前と諸物価の高とうで国内事業、事務局経費を賄うのが精いっぱい、国際事業へ繰り入れる余裕はまったくない。国際部の拡充などにより「資金部、財務部の確立が先決」という意見も一部にある。

また、男女ナショナルチームもアジア予選といえば日本で、といった甘えを捨てて構えなければいけない。出かけて行って勝つ、このたくましさを備えておいてもらわないと困るのである。

アジアハンドボール界の始動は日本ハンドボール界に、さまざまな波紋を投げかけることが予測され、躍進の好機は、一変、危機となる不安を抱きあわせているのを深刻にうけとめるべきであろう。

国際行事カレンダー

昭和49年度（下半期）
- 第6回世界学生選手権（1月，ルーマニア）
- クウェート男子国際トーナメント（1月，クウェート＝出場の予定なし）
- 第6回世界女子選手権アジア予選（3月，？）

昭和50年度（1975年）
- モントリオールカップ（男）（9月，カナダ）
- モントリオールオリンピック男子アジア予選
- 第6回世界女子選手権（12月，ソビエト）

昭和51年度（1976年）
- モントリオールオリンピック女子3大陸代表決定戦（7月，アメリカまたはカナダ）
- モントリオールオリンピック（7月，カナダ）

昭和52年度（1977年）
- 第1回世界ユース選手権（4月，未定）
- 第9回世界男子選手権アジア予選（？）
- 第7回世界女子選手権アジア予選（？）

昭和53年度（1978年）
- 第8回アジア競技大会（パキスタン）
- 第9回世界男子選手権（デンマーク＝予定）
- 第7回世界女子選手権（チェコ＝予定）

昭和54年度（1979年）
- オリンピックアジア予選

昭和55年度（1980年）
- オリンピック（モスクワ）

評議員会制度に終止符打つ

「代議員」採用へ規約を改正

全国評議員会 全国理事会

日本協会現行規約による最後の全国評議員会、同理事会になるであろう両会議が、10月13日東京渋谷の岸記念体育会館（体協）で開かれた。

午前10時18分からの全国理事会は、荒川清美理事長によるＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）総会の報告（4頁詳報）にともなう今後のアジア対策、頂点強化対策について協議が行われたあと、日本協会規約の全面改正を検討、常務理事会提出の改正原案を無修正で承認した。

午後2時35分からの臨時全国評議員会は、出席者1人というさびしさで、各案件を無言の委任状が可決する異常な風景。評議員会に代る代議員会制度を打ち出した日本協会新規約の〝承認〟をこれほど象徴的に示すものはなかった。

この結果、日本協会は、昭和50年1月1日を期して新規約を施行することが本決り、30年近い歴史を刻んだ評議員会制度が姿を消し、最高議決機関、意志決定機関として代議員会を設け、〝新生〟することとなった。（新規約の全文は12頁参照）

「国際問題」には柔軟な姿勢で

登録種別に「少年」「高専」追加

全国理事会

◇出席　20理事（定数33名以内、現在数30名）＝成立

オブザーバーとして、高専界の代表者となっている橋本哲雄氏（長岡高専教授）の陪席を認めて開会。

報告事項のあと、まず「48年度日本協会決算」を審議、承認した。

つづく議題は「アジア対策」「男女頂点強化」「国際事業（50年度）」と、今後の日本ハンドボール界の消長を左右する大きなテーマばかりで、緊張した雰囲気となった。

「アジア対策」については、アジアにおけるハンドボールの急成長とアジア競技大会種目での採用が喜びをもって迎えられたものの各国間に、スポーツ界のレベルだけでは解決できぬ問題が介在するため、各理事の発言も慎重。荒川理事長は「スポーツの世界から、政治を切りはなして考えることは残念ながら難しくなった。特にアジアハンドボール界の課題は〝それが総て〟でもある」と述べ「外」の力と動きにどう対応していくか、柔軟な姿勢をとることを明きらかにし支持をうけた。

また、「中国問題」はＩＨＦ総会（5頁詳報）で、まったく話題とされなかったこともあり、意見交かんは少なく、48年1月21日の全国会議（評議員会・理事会＝本誌105号参照）で申し合わせた「中国承認の意向をもつ日本体協、ＪＯＣ（日本オリンピック委）の態度尊重」を再確認したに留った。

また、クウェートらにより準備中のアジアハンドボール連盟への対しょは、ＩＨＦが認めない態度を示したため（5頁参照）「成りゆきを見守る」ムードが支配的で、執行部内に特設された国際事業交流委員会に、当分の間預けるかたちとなった。

「アジア予選」には消極姿勢

「男女頂点強化」については、本誌2頁所報のとおり、渡辺（慶）技術部長から提案された昭和49年度男女ナショナルチームを原案どおり承認した。

モントリオールオリンピックアジア予選（申しこみ締切りは今秋11月10日）は「頂点強化セクションからみれば、ホームコート（日本国内）での開催が望ましいだろうが、アジアの〝複雑な事情〟を考えると、ミュンヘン時のような日本開催に固執することは得策でない」とする荒川理事長、杉山総務企画部長の発言を、そのまま受け止めた。

しかし、日本以外のアジア諸国の中で、ＩＨＦ規格のコート（40m×20m）をとれる体育館のある国が限られているため、日本協会のこの〝消極的姿勢〟が、どこまで通じるかは疑問とするむきもあり、今後、二転三転しそうな雲行きである。

なお、同予選は、すでにＩＨＦから、その期日として6通りのスケジュールが別表のように指示されており、日本協会は⑤、⑥の線を希望することとなった。

だが、この問題もエントリー数や、予選方法などのからみで確定にいたるまでの段階にかなりの困難があると予想され、とりあえず、③以降の4案に応変できるよう強化計画などを組むことになった。

…モントリオール予選期日…

① 昭50. 11. 3～11. 9
② 昭50. 11. 24～11. 30
③ 昭50. 12. 15～12. 21
④ 昭51. 2. 2～2. 8
⑤ 昭51. 2. 16～2. 22
⑥ 昭51. 3. 1～3. 7

このため、来年の第27回全日本総合選手権の日程や、開催方法はかなり変則的なものになりそうだ。

第22回ＮＨＫ杯（50年下半期に開催）は、いっさい白紙。

また、来年度以降学連、実連による日韓交流を日本協会事業から切りはなす提案が、執行部から初めて示され、両連盟の検討を待つこととなった。

今年度休止された高校交流は、日本体協事業のため、その動向にしたがう。

規約改正案 無修正で採決

この日の焦点ともいうべき「日本協会規約の全面改訂」は改正案草案者の大野常務理事から説明をうけたのち、検討に入った。

委任状によって重要案件可決（または否決）の行われる現状に、各理事の批判も多かったため、代議員制度を史上初めて採用するにしては、議論は沸かず、むしろ懸案事項がようやく解決される、という空気が強かった。

全国理事会が、評議員会制度に疑問と不安をもちはじめたのは、あるベテラン理事に云わせると昭和30～35年代からだそうだが、本誌の調べでは、昭和38年秋の会議で持ち出された記録がある。

具体的な規約改正機運が高まっ

たのは、理事会ではなく、熱心な評議員の〃自己批判〃的なことが発端で48年2月、同11月、49年2月の3回の評議員会で話し合われている。

田村会長も就任直後から、出席者の少ない評議員会をなんとか盛りあげようと、委任（文書）出席のほか代理出席まで認める規約改正を行ったが奏効せず、ついに、昨秋の会議で、全面改正による代議員制度採用を決意したものである。

こうした経過をたどったあとだけに、各理事も現行規約への執着は極めて少なく、あっさりと原案が無修正で承認された。

なお、新規約の施行は50年1月1日。各都道府県協会、各加盟団体は49年12月31日までに代議員を新任することも決められた。

自衛隊の特別扱い終わる

このほか、国体の年令別採用や、高専の活動本格化にともない、明年以降の日本協会登録規程の改正について協議が行われ、新たに「少年」「高専」の部が設けられることとなった。財務部提案の「一般C」に個人登録料を附加する件は見送られた。

新登録種別は次のとおりで、これまで登録料を必要としなかった国体出場のための高校混成チームも、来年以降は、少年の部に所定の手続きが必要となった。

	登録料 チーム	登録料 個人	五輪基金
一般A(既)	要	要	要
一般C(既)	要	不要	不要
学生(既)	要	不要	要
高校(既)	要	不要	要
少年(新)	要	不要	不要
高専(新)	要	不要	要

機関誌購読料は一般A、学生、高専が義務づけ、高校が49年度同よう。一般Cと少年は不要である。

登録料、オリンピック基金、機関誌購読料は来春2月の全国代議員会で決められる。

また、44年から6年間(3期)にわたり、特別扱いしていた自衛隊チームの日本協会登録は、本年度限りでいっさいの特例を廃すこととなり、富永理事（自衛隊連）も承諾した。ただし、自衛隊チームが実連系の全国大会へ出場する件は、実連と自衛隊連の話し合いにゆだねることになった。

―昭和48年度日本協会収支決算―

【収入】	（単位円）
加盟金	910,000
体協補助金	4,830,000
登録料	4,662,600
検定料	2,815,000
審判審査料	376,000
機関誌購読料	4,367,800
同広告料	1,180,000
刊行物売上	989,800
諸大会事業	23,956,911
協力金	600,000
オリンピック基金	691,400
雑収入	1,026,437
	46,405,948
【支出】	
ＩＨＦ加盟金	159,752
日体協加盟金	100,000
事務局人件費	2,311,800
備品費	12,500
印刷費(含機関誌)	607,105
通信費	710,410
協会室賃借料	720,000
会議費	631,210
事務費	317,922
渉外交際費	139,171
総労企画部費	1,281,966
財務部費	188,000
技術部部費	2,551,759
審判部部費	1,791,910
普及指導部部費	184,170
中学部費	550,000
編集部費	4,732,553
強化委員会費	109,330
ＩＦ会議派遣費	240,000
諸大会事業	26,785,520
雑損失	320,000
	44,436,308
【当期剰余金】	1,969,640

全国評議員会

出席者1人、淋しく幕

◇出席 1評議員◇委任状29通（定数、現在数とも52名）＝成立

定刻に会場へ来られたのは山田計評議員（全日本教職員連）ただ一人。

田村会長のかたわらに積まれた29通の委任状が会議を成立させた。

会長、3人の副会長、理事長、8人の常務理事が山田評議員を囲んで座る異様な風景。

荒川理事長が次々と報告事項を述べる。

つづいて「48年度決算」をはじめとする協議事項。協議というより一問一答だ。

〃問題〃の「日本協会規約改正」。『評議員会制度を崩すのは、ある意味では一歩後退だ。だが、この現実を見ては、原案に反対はできない』……なんともさびしい山田評議員のこれは「承認の弁」だった。29枚の委任状が肯く。

こうして、日本協会発足以来の評議員会制度はピリオドが打たれた。

評議員会を最高議決機関として打ち出し「理事会は評議員会の決めたことだけやってくれればいい」と大見栄を切って現行規約が施行されたのは9年前―40年11月9日である。

このシステムを守れなかったのは、いったい誰だったのだろう。

山田評議員は『評議員会が評議員にとって魅力のある会議ではなかったのではないか。評議員に出席してもらうよう執行部はどれだけ研究し、努力したのか』と問い荒川理事長が猛然と反論した。

この会議で、唯一回の議論であった。

約45分で執行部提出の案件がすべて承認され、最後の全国評議員会は幕を閉じた。

山田評議員の主な質疑と執行部側の回答は次のとおり、

（質疑）一、代議員制度を採用するが、評議員会と同じような〃末路〃をたどりはしないか。

二、国際事業が男子に偏向していないか、女子交流が少なすぎる。

三、ＩＨＦに対する国際審判員推せんは、各組織（都道府県協会）各加盟団体からの推せん者の中から選任された者か。

四、小中学校指導者に対する講習会の開催を考慮されているか

（回答）一、各組織、各加盟団体に対して代議員として選任するにあたっては①会議に出席できる人②財政問題国際問題など日本協会最高議決機関に参画できる能力の人といった点を充分考慮してもらうつもりである(田村会長)。年度当初に会議(2月、10月)の日程を決めたい（荒川理事長）

二、ヨーロッパ女子は、相手側の事情（職業、育児など）で日本に招くことが難しいが、けして女子を軽視しているわけではない。来年の東ドイツ交流は女子を予定している（荒川理事長）

三、審査委員会の責任によって人選した（嶋田常務理事）

四、開催したい意向はあるし、開催の実績もある。ただし、最近は数育委がらみの問題もあり、難し

久留米工、大谷らも出場　今年の全日本総合

今年度のナショナルチャンピオンチームを決める第26回全日本総合選手権は12月11日から15日まで、東京体育館で行われる。

出場チームは男子16、女子12チームで、今春2月の全国評議員会において加盟団体別のチーム配当数は決まっており、すでに3連盟からエントリーが届いている。

今夏の全日本高校選手権優勝の男・久留米工（福岡）、女・大谷（大阪）も揃って出場の意思を明らかにしている。

10月25日までに出場確定のチームは次のとおり

【男子】大同製鋼（愛知）、湧永薬品（大阪）＝以上日本協会推せん。海上鹿屋（鹿児島・全日本自衛隊連推せん）、久留米工高（福岡・全国高体連ハンドボール部推）大阪イーグルス（大阪）、茨城教員（茨城）＝以上全日本教職員連推

【女子】日本ビクター（茨城）、田村紡（三重）＝以上日本協会推せん、大谷高（大阪・全国高体連ハンドボール部推）

くなってきている。前向きの姿勢で検討中だ（荒川理事長、宮本・渡辺慶常務理事）

全日本高校優秀選手決まる

このほか、この日の両会議で恒例の「49年度全日本高校優秀選手」（男女各15名＝別掲）が承認されたほか、今夏、初の全国大会を開いた高専の全国組織を進めたいとする高専関係者の意向を了承した

早ければ「全国高専ハンドボール連盟」（仮称）は、来春早々、日本協会へ加盟申請手つづきを行うことになる模様。

人事面では、審判審査委によって、今年度のIHF国際公認審判員として安藤純光、佐野和夫、岡前義春の氏が推せん（報告事項）された。また、空席の会計担当理事に光嶋浩氏（早大出）の就任を要請することも決めた。

3部合同会議のスタッフは、技術部から竹野泰昭、普及指導部から大西武三の両氏が追加され、技術部の近藤金博氏は藤原侑氏と入れ替った。これで同会議は11名。

インターハイは塩山市で
女子実業団もサーキット化へ

50年度事業については、モントリオール・オリンピックアジア予選が未決りとならないほか、全日本学生、全日本実業団各選手権などが未定。全日本実業団選手権は男子同よう、女子もサーキット化をとる方向で検討が進んでいる。

これまでに決定（または内定）の来年度大会は次のとおり

▽第7回全日本自衛隊選手権6月（東京）
▽第26回全日本高校選手権　8月2～7日（山梨県塩山市）
▽第18回全日本教職員選手権　8月10～13日（佐賀県神埼町）
▽第4回全国中学生大会　8月（石川県小松市）
▽第2回全国高専選手権　8月（場所未定）
▽第30回国民体育大会ハンドボール競技　10月27～31日（三重県四日市市）
▽第27回全日本総合選手権　12月（東京の予定）

日本協会・神田財務担当常務理事は、全国理事会で特に発言を求め「オリンピック、アジア大会などますます国際事業の拡充するなかで、役員陣がこれまでのような財政感覚では、早晩、日本協会は重大な危機に直面するだろう。

アマチュアスポーツに精神性、教育性は重大要素であるが、その信念を押しとおすなら、国際事業の縮少を覚悟しなければならない」と〝警告〟を述べた。

これに関連して田村会長は「新しい観点に立った歳入を考えるべき時機がきていると思う」との意向を明らかにし注目された。

日本協会財政は、加盟金、登録金などが頭打ちとなり、しかも事務局経費がかさむ一方で、窮迫した事態を目前にしており、今後、首脳陣が、どのような打開の道を見出すか、深刻な問題となっている。

S・ピルゼン（チェコ）
グラノラース（スペイン）
来春の招待試合候補

日本協会は、恒例の新シーズン（50年3～4月）開幕国際試合の候補チームとして先シーズンチェコチャンピオンとなったスコダ・ピルゼンとスペインチャンピオンのバロンマノス・グラノラース両クラブを決め、国内の受けいれ準備をはじめた。

スコダ・ピルゼンは、ミュンヘンオリンピック準優勝の原動力となったヤリ、ハバー、クレピンダルら4人のナショナルプレイヤーを中心にした強豪で、昨シーズンチェコリーグで22戦16勝4分2敗の成績で優勝。

グラノラースは、ここ3年、毎シーズンのように来日を希望していたもので、GKクロス、チチガイバイ、ラガ、プラ、カウサらのナショナルプレイヤーが主軸、スペインチャンピオンとしてヨーロッパカップの常連でもある名門だ。

日本協会の新シーズン開幕国際試合は、46年春のグンメルスバッハ（西ドイツ）来日以来、恒例となっているもの。ピルゼンは3月に5試合、グラノラースは4月に3～5試合を予定している。

―昭和49年度全日本高校優秀選手―

【男子】

▽GK

氏名	学校	身長
原島　伸次	久留米工	181
加藤　三郎	湯沢	176

▽FP

氏名	学校	身長
関川　哲也	小倉西	169
神野　宗久	小倉西	169
西尾　寿明	小倉西	179
迫村　洋一	小倉西	165
椿原　美春	久留米工	175
秋吉　一男	久留米工	172
中島　誠一	久留米工	171
原田　宗徳	岩国工	177
泉　賀都彦	岩国工	189
★由利　淳	湯沢	181
郷古　紀一	仙台育英	169
鈴木　光昭	名城大付	170
吉見　昌憲	桃山学院	183

【女子】

▽GK

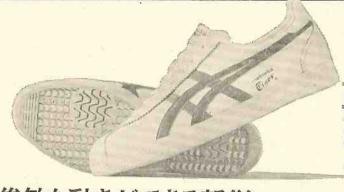
氏名	学校	身長
中田　智子	大谷	165
丸山かよ子	熊本女商	166

▽FP

氏名	学校	身長
秦　裕子	新居浜市商	157
加藤小百合	新居浜市商	164
河野久美子	新居浜市商	157
横山祐美子	秋田和洋女	162
向井　友子	秋田和洋女	163
池渕　澄江	大谷	161
今井　晴美	大谷	158
木戸ひとみ	小松市女	172
西峰　茂子	広島一女商	162
★伊藤　典子	徳山	166
川波　理子	筑紫女学園	158
手塚るみ子	国分実業	163
伊東　照美	熊本女商	153

・数字は身長（cm）
・★印は2年連続受賞者

日本ハンドボール協会規約（全文）

第1章　総　則

（名称）第1条　本会は日本ハンドボール協会という

（事務所）第2条　本会は、事務所を東京都渋谷区神南1丁目1番号岸記念体育会館内におく

（組織）第3条　本会は、各都道府県においてハンドボール競技団体を統轄代表する協会（以下「都道府県協会」という）で組織する

（目的）第4条　本会は、日本におけるハンドボール競技団体を統轄代表し、ハンドボール競技を振興して国民体育の向上とスポーツ精神の涵養を図ることを目的とする

（事業）第5条　本会は、前条の目的を達成するため次に掲げる事業を行う。

(1)　全国的な競技会の開催
(2)　国際競技会の開催および代表選手団の派遣
(3)　競技規則の制定およびその実施
(4)　競技の技術の指導、研究および普及
(5)　用具および施設の研究拡充
(6)　会誌その他の刊行物の発行
(7)　その他本会の目的達成に必要な事業

第2章　機　関

第1節　代議員会

（権限）第6条　代議員会は、本会の最高議決機関として本会運営の基本方針を定める。

2、代議員会は、本会の会長、副会長および監事を選出する

3、代議員会は、この規約に別に定めるもののほか、次に掲げる事項を議決する

(1)　規約の改正
(2)　予算
(3)　事業計画および資金計画
(4)　財団法人日本体育協会への派遣役員の承認
(5)　決算の承認
(6)　事業報告の承認
(7)　その他理事会において代議員会に付議することを相当と認めた事項

（代議員）第7条、代議員は、各都道府県協会および本会加盟の全国連盟がこれを選任する。

2、都道府県協会の選任する代議員の数は、各都道府県協会1名とし、全国連盟の選任する代議員の数は若干名とし、代議員会において、その数を決定する

3、代議員の任期は2年とし、再任を妨げない

4、各都道府県協会および本会加盟の全国連盟は、代議員の任期の終了する年の末日までに、代議員を選任するものとし、代議員の任期は、選任されるべき日の属する年の翌年の1月1日から起算する

5、代議員に欠員を生じたときは各都道府県協会および本会加盟の全国連盟は補欠の代議員を選任しなければならない。補欠の代議員の任期は前任者の残任期間とする

（代議員会の会議）第8条　代議員会は、会長がこれを招集し、その議長となる

2、代議員会は定例代議員会と臨時代議員会とし、定例代議員会は毎年1回原則として2月中に開くものとし、臨時代議員会は、代議員総数の5分の1以上の要求があったとき、または理事会の議決があったときに開くものとする

3、代議員会は、代議員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決をすることができない

4、代議員会の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる

5、代議員は、文書をもって他の代議員に権限を委任することができる

第2節　執行機関

（会長および副会長）第9条　会長は、本会の会務を総理し、本会を代表する

2、本会に副会長若干名を置く

3、副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、または会長が欠けたとき、あらかじめ会長が指名した順序で、その職務を行う

4、会長は第8条第4項（第13条で準用する場合を含む）に定める決裁権を有するほか、常務理事会に出席して意見を述べることができる

5、副会長は代議員会、理事会および常務理事会にそれぞれ出席して意見を述べることができる

（顧問および参与）第10条、本会に顧問および参与を各若干名置く

2、顧問および参与は、本会の功労者または協力者の中から理事会が推せんし、代議員会の承認を経て、会長がこれを委嘱する

3、顧問および参与は、代議員会に出席して意見を述べることができる

（理事会）第11条　理事会は、理事で構成し、代議員会の定めた基本方針に基づいて運営計画を定めるとともに、その執行にあたる

2、理事会は、第6条第3項の案件を審議するほか、次の各号に掲げる事項を議決する

(1)　この規約を施行するために必要な規程の制定
(2)　その他本会の運営計画および

その執行に関する事項

（理事）第12条　理事は、次の各号に掲げる団体の推せんに基づき当該各号に定める員数の範囲内で代議員会の議決を経て会長が委嘱する。

(1)　第25条の規定による地区連盟　9名

(2)　第24条の規定による全国連盟　10名

2、会長は、前項のほか、前項第1号に掲げる員数と同項第2号に掲げる員数の2分の1の合計を越えない範囲内で、代議員会の承認を得て理事を委嘱することができる。

3、理事は、理事会を構成するとともに会長の指示を受けて会務の処理にあたる

（理事会の会議）第13条　第8条第1項、第3項および第4項の規定は、理事会にこれを準用する

（常務理事会）第14条　常務理事会は、理事長および常務理事若干名で構成し、理事会の定めた運営計画に基づき、常時その執行にあたるとともに、代議員会および理事会に提出する案件の作成にあたる

2、常務理事会は、緊急の必要が生じた場合は、第11条第2項第2号の規定にかかわらず、代議員会の定めた基本方針に基づいて運営計画を定め、これを執行することができる。ただし、処理後はじめての理事会の承認を得なければならない

3、理事長および常務理事は、理事の互選によりこれを選出する

4、理事長は、会務の処理を統括し、常務理事会の議長となる

5、常務理事は、会務を常時分掌処理する。

（専門委員会）第15条　専門委員会は、担当理事および専門委員若干名で構成し、専門的事項に関し常務理事会に提出する案件を作成する

2、専門委員は、常務理事会の推せんに基づき、会長がこれを委嘱する

（海外駐在代表）第16条　本会に海外駐在代表を若干名置く

2、海外駐在代表は、常務理事会の推せんに基づき、会長がこれを委嘱する。

3、海外駐在代表は、会長の指示した事項の処理にあたる。

（任期及び兼職の禁止）第17条　会長、副会長、顧問、参与、理事長、常務理事、理事、専門委員および海外駐在代表（以下「役員」という）の任期は2年とし、再任を妨げない

2、役員に欠員を生じたために後任者を補充したときは、後任役員の任期は、前任者の残任期間とする。

3、役員は代議員の職と兼ねることができない。

第3節　監事

第18条　本会に監事3名を置く

2、監事は、本会の決算を監査する

3、前条の規定は監事に準用する

第3章　会　計

（会計年度）第19条　本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る

（経費の支弁）第20条　本会の事業遂行に行する経費は、次の各号に掲げる収入金をもってあてる。

(1) 各都道府県協会の加盟金
(2) 登録金
(3) 大会参加料
(4) 用具検定料
(5) 審判審査料
(6) 競技規則集領布料
(7) 補助金
(8) 寄付金
(9) 放送料
(10) その他の収入

2、放送料は、本会の主催または共催する試合に支払われたテレビジョン放送料の10分の1を本会の収入とする。

（特別会計）第21条　本会が行なう特別事業については、特別会計を設けることができる

（資産の管理）第22条　本会の資産は会長がこれを管理する

（決算の監査）第23条　監事は、毎年度本会の決算を監査し、その結果および意見を代議員会に報告するものとする

第4章　加盟団体

（全国連盟）第24条　本会は全日本学生ハンドボール連盟、全国高等学校体育連盟ハンドボール部、全日本実業団ハンドボール連盟、全日本教職員ハンドボール連盟、全日本自衛隊ハンドボール連盟など全国的ハンドボール団体について代議員会の議決を経て加盟団体とすることができる

（地区連盟）第25条　本会は、各都道府県協会の運営を円滑するため代議員会の議決を経て、地方別に地区連盟を置くことができる

第5章　雑　則

（職員）第26条　本会は、本会の事務処理のため有給の職員を置くことができる

（規約の改正）第27条　この規約を改正するためには、第8条第4項の規定にかかわらず、代議員の現在数の2分の1以上の賛成をもって議決しなければならない

附　則

1、この改正による規約は昭和49年10月14日から実施する

2、この改正前の規約に基づく評議員および評議員会は、昭和49年12月31日まで存続するものとし従前の規定を適用する

3、本会加盟の全国連盟の選任すべき代議員の数は当分の間各1名

4、各都道府県協会および本会加盟の全国連盟は、昭和49年12月31日までに代議員を選任のこと。

日本協会審判規程も一部改正

日本協会では、10月13日の全国会議（評議員会、理事会）で「日本協会公認審判員規定」を後掲のように一部改正した。また公認審判員携帯用具の頒価料改訂も承認いずれも翌日付で施行に移した。

【日本協会公認審判員規定】4（D級の審査）D級の審査は各都道府県協会審判部において行ない、認定者を毎年3月31日までに日本ハンドボール協会審判部にD級認定料一五〇〇円（コイン、審判手帳胸マーク代を含む）を添えて報告する。

【日本協会公認審判員携帯用具新価格】①コイン　四〇〇円（一個）②審判員手帳　三〇〇円、③ワッペン～胸マーク～　八〇〇円

アマ規程も手直しか　日本協会は、10月12日の月例常務理事会で、IOC（国際オリンピック委員会）が、アマチュア規程の原典ともいうべき、IOC憲章第26条（大会参加資格）の改正を検討していることから、近くIHF（国際ハンドボール連盟）も、その線にそった改正を行うものとみて「日本ハンドボール協会アマチュア規程」（本誌120号参照）の手直しを研究するよう申し合わせた。具体的な作業については白紙である。

中央、初優勝の好機

全日本学生

第17回（女子第10回）全日本学生選手権が11月20日から24日まで仙台市の宮城県スポーツセンター（20、21日は東北工大体育館併用）に男子32、女子12校を集めて行われる。

オリンピックにつづきアジア大会実施の報告は学生界をいちだんと活気づかせ、しかも世界学生（50年1月、ルーマニア）への参加を決めたあとだけに、この大会も近来にない盛りあがりを期待できる。優勝の行方を探ってみよう。（編集部）

優勝候補同組にひしめく

▼男子　組み合わせ抽せんは、非情にも優勝候補をひとかためにしてしまった。特に2連覇を目指す法政と大阪体大のパート、早稲田、名城、京都産大、日体が激突するパートはすごい。本来ならこの6校に中央、中京がベストエイトに並ぶべき実力校なのである。

中京は、大阪経大さえ気をつければまず準決勝進出が固い。中央も躍進めざましい九州産大のほか桃山学院、甲南、日大など巧者に囲まれてはいるが、実力さえ出し切れば難しい相手ではあるまい。

問題の両パート。法政×大阪体大は順当なら2回戦でぶつかる。両校は、去年も1回戦で激突、法政が13—10で勝ち、勢いにのって初優勝を遂げている。今年もこの一戦は大きなヤマだ。

早稲田×日体も壮烈な試合になりそう。まったく予断を許さない。この勝者と京都産大の対戦（3回戦）も、京都が、関東勢に対し激しい斗志を燃やしているだけに面白い。

さらに、この有力各校に対する1回戦の相手が東北学院（法政）、明治（大阪体大）、芝浦工大（京都産大）、名城（早稲田）と曲者揃いなのも無気味。東北学院は、関東遠征など意欲的な強化をつんでいるし、明治と名城の一発の強さは定評がある。復調の波にのる芝浦工大も、こうした場で勝って、自信をいっそうつけたいところであろう。

北信越で抜きん出た力を見せる金沢工大の力も侮りがたい。

ともかく、この両パートから準決勝までこぎつけるのは、大変な苦労がいる。

あえてベストフォアの組み合わせを予想すれば法政・大阪体大×早稲田・日体、中京×中央。

後者は、六分四分で中央優勢だが、前者は神のみぞ知るである。

さて、優勝争いだが、中央は不思議に、全日本学生となると勝てない。しかし、今回は決勝の相手が早稲田、法政以外の相手なら六分どおり有利とみたい。これが早または法だと五分五分ではないか。

このほか波乱を招くとすれば慶応、東京教大、東京学芸、同志社らの東西勢、北大、仙台大、広島修道らの地方勢だろう。

5連覇目指す日体
あと追う東女体、武庫川女

▼女子　男子同よう、東西の有力校日体と大阪体大が2回戦で当たり、その勝者に中京がからむ。

5連覇目指す日体は、この大会9回のうち8たび優勝を飾り、学生界では文字どおり女王の座に君臨しているが、実業団との差はせばまらず、このため男子ほど実績が評価されない。

藤原監督は「女子インカレの声価を高めるためにも、実業団の一角へ食いこみたい」と、照準を、この大会の優勝と、12月の全日本総合へ当てている。この意欲に期待をかけたいが、大阪体大、中京の力も上がっており、楽な試合ばかりとはいえぬ。

一方のパートは東京女体大と武庫川女で決勝進出を争おう。

武庫川女は、前年、関西勢として初の3位入賞、関西1位の位置をゆるぎないものとし、今年の目標を一つ進めたところにおいているが、東京女体大の攻守も、日体と甲乙つけがたいものがある。激戦となろう。

決勝は、よほどの波乱がない限り、日体×東女体大・武庫川女の顔合せだ。各校とも、安定感で今ひとつ物足りず、この段階に来て〝接戦〟〝混戦〟の予報を出さざるを得ない。

ダークホースは、例年どおり中京。このほか福岡教大、山口大、岐阜大のレベルアップも注目していい。

前年準優勝の東京教大は多くを望めず、中京女もひとところの元気がない。関西の強豪甲子園女短大が欠けるのはさびしい。

なお、男子は上位3校、女子は上位2校が、全日本総合（12月11～15日、東京体育館）への出場権を得る。

◎各地学生秋季リーグ戦

金沢工大8連勝遂ぐ　北信越

秋の学生リーグのトップを飾って北信越学生秋季リーグ戦が9月14日から16日まで福井大第一体育館に6校（男子のみ）が参加して行われ金沢工大が8シーズン連続9度目の優勝を飾った。

昭和39年秋発足以来、今シーズンは10周年を記念するもので、各校の実力伯仲は成長を祝うにふさわしい好内容のリーグ戦となった。

優勝を争うとみられた春季1、2位の金沢工大と富山大が第1日で顔を合わせ、金沢工大が前半の優位を辛くも守って制勝、ホームコートの福井大が金沢大を破り、両校が一歩リードした。

ところが第2日、福井大は富山大に、金沢工大は金沢大にいずれも引き分け、混戦模様で優勝争いは最終日にもちこまれた。

まず、圏内に残る富山大×金沢大が引き分けて、ともに一歩後退。福井大、金沢工大は1勝を順当に積みあげ、この時点で福井大が3勝1分、得失点差33、金沢工大が3勝1分で32と互角の戦況だった。

最終戦で顔を合わせた両校は、かつてない盛りあがりのうちに試合を進めた。

福井大は滑り出しよく5—3と先行したが金沢工大も前半終了時にタイ、後半にすべてがかかりムードは最高潮。前半同よう福井大はリードを奪い、18分8—6と優位に立ったが、金沢工大は20分5度目の同点に追いついたあとタイムアップ30秒前、貴重な得点を連続して勝利を握り、辛くも首位の座を確保した。

3位は金沢大、前季準優勝の富山大は元気なく5位に終った。

惜しかった福井大

福井大 16（11 5－7 5）12 金沢大
金沢工大 14（6 8－6 4）10 富山大
金沢美術工芸大 15（7 8－7 5）12 信州大
金沢工大 18（10 8－2 2）4 信州大
富山大 13（8 5－6 7）13 福井大
引き分け
金沢工大 9（3 6－6 3）9 金沢大
引き分け
福井大 30（18 12－4 3）7 金沢美術工芸大
富山大 19（13 6－0 2）2 信州大
富山大 8（5 3－5 3）8 金沢大
引き分け
福井大 16（7 9－6 4）10 信州大
金沢工大 21（13 8－5 2）7 金沢美術工芸大
金沢大 30（15 15－3 2）5 信州大
金沢美術工芸大 23（11 12－7 5）12 富山大
金沢工大 10（5 5－3 5）8 福井大

【順位】①金沢工大4勝1分②福井大3勝1分1敗③金沢大2勝2分1敗④金沢美術工芸大2勝3敗⑤富山大1勝2分2敗⑥信州大5敗

北信越学連10年間の優勝回数
▽金沢工大・9回　▽富山大・9回　▽金沢美術工芸大・2回
▽金沢大・1回

関東前半戦終わる　女子は日体と東女

中央・法政・日体・早稲田順調

関東学生リーグは男子が1部から5部まで計45校、女子6校が参加して9月29日東京・駒沢オリンピック運動公園（屋内球技場）で開幕。本誌締切り（10月21日）までに各部とも前半戦（4日間）を終了、注目の1部は2連覇を狙う中央をはじめ早稲田、日体、法政のビッグフォアが、気力にあふれたプレーでそれぞれ4戦全勝と好調、22、26、27日の3日間にわたって行われる〝4強戦〟への球趣をいちだんと高めた。

前半戦は、またしても上位4校と下位4校の実力差がはっきりしすぎ、まったく波乱はなかった。

しかし、夏のはげしいトレーニングを経てBクラス各校も、かなり力をあげており、結果的には敗れたもののなかなかの善戦で、1部の面目をどうにか保つことができている。

特に法政×明治は、後半明治の追いあげでもつれた。10分11—9から20分15—11と開いた法政はセーフティリードとみえたが、明治はそのあと2本の7MTを山岡が決めるなどして、タイムアップ1分前には16—17と迫る健斗だった。

かつての看板カード・日体×芝浦工大も、芝浦が元気を取り戻した攻勢でせりあい、後半15分13—13と互角、日体はここで3点をとり辛くも逃げこんだ。

中央×日大も激戦。前半6たび同点から中央は連続5ゴールしたが、日大もすぐ3点を奪い返し、後半に興味をつないだ。中央は先行しながらも主導権を握れず、後

（終盤戦の記録は次号）

半10分13—11から7MTで15—11とはなし、ようやく振り切った。

中央は春季に比べ切れ味に鋭さがなく4強戦突入へ不安をのぞかせた。

2部は国士館が4勝をマーク東京教大、駒沢、明星らがつづいている。

女子は予想どおり日体、東女体が快進撃、2シーズン連続同率優勝だけに、両校とも今季こそ〝結着〟をつけようと張り切っている。

明治・芝浦工大頑張る

◇第1日（9月28日）

▽1部

中央 22（11—7，11—3）10 芝浦工大

早稲田 30（14—8，16—5）13 日大

法政 17（8—11，9—5）16 明治

【明治】得
GK 岡部 0
FP 指宿 4、山岡 4、山根 1、石井 0、江幡 3、松本 0、加納 4

【法政】
GK 0 森田、0 柴田
FP 1 矢島、0 高橋、2 大西、9 上滝、3 村田、0 青山、2 阿部、0 古関、0 辻

17（0）7MT（3）16

日体 30（18—5，12—11）16 慶応

▽2部

駒沢 19—13 関東学院

国士館 23—16 明星

東京教大 18—13 順天堂

東海 18—16 東京学芸大

▽女子

日体 23（15—1，8—1）2 日女体大

◇第2日（9月29日）

▽1部

早稲田 24（13—8，11—9）17 明治

中央 23（15—7，8—6）13 慶応

法政 20（11—5，9—6）11 日大

日体 22（12—9，10—8）17 芝浦工大

【芝浦】得
GK 吉田 0
FP 吉川 0、押切 1、斉田 7、新井田 3、安中 1、柳沢 2、柳原 3、外屋 0、伊集院 0

【日体】
GK 0 斉藤将、0 清水
FP 3 喜井、2 橋本、3 中山、0 竹本、5 斉藤幸、5 坂本、1 大房、0 本根、3 後川、0 半田

22（2）7MT（1）17

▽2部

東京学芸大 13—11 順天堂

東京教大 28—9 東海

明星 17—10 関東学院

国士館 25—11 駒沢

▽3部

成蹊 19—17 防大

青山学院 21—11 都立大

東京工大 11—10 立教

千葉工大 17—10 横浜商大

▽4部

専修 14（分）41 上智

神奈川大 25—14 千葉商大

茨城大 16—15 千葉大

武蔵工大 20—19 東大

▽5部Aブロック

明治学院 29—17 東京写真大

一橋 16—13 亜細亜

東京経大 不戦勝 東邦

▽同Bブロック

和光 不戦勝 東京農工大

独協 19—13 横浜市大

武蔵 20—12 東京理科大

独協 16—19 和光

▽女子

東女体大 21（16—0，5—2）2 日女体大

東京学芸大 16（11—2，5—2）4 東京教大

◇第3日（10月1日）

▽3部

成蹊 20—11 立教

青山学院 29—13 横浜商大

千葉工大 17—5 都立大

▽4部

東大 23—15 上智

専修 13—12 武蔵工大

千葉大 21—16 千葉商大

神奈川大 15—8 茨城大

▽5部Aブロック

一橋 不戦勝 東邦

亜細亜 26—23 明治学院

▽同Bブロック

東京理科大 15—9 独協

武蔵 13—12 東京農工大

日本工業大 20—12 和光

東京農工大 11（分）11 横浜市大

中央、日大に辛勝

◇第4日（10月5日）

▽1部

早稲田 26（12—8，14—4）12 芝浦工大

法政 24（11―5、13―3）8 慶応
中央 19（8―6、11―9）15 日大

【日大】

		得
GK	上野	0
	高村	0
FP	小宮	4
	金子	3
	湖田	0
	大隅	0
	阿部	5
	菊地	0
	西子	1
	大塚	2
	桜井	0
	新井田	0

【中央】

得		
0	柴田	GK
0	田村	
2	松本	FP
6	上村	
4	蒲生	
1	松下	
2	佐野	
3	大熊	
0	藤本	
1	戸田	
0	植木	
0	関	

19（2）7MT（2）15

日体 20（9―5、11―9）14 明治

▽2部
駒沢 18―8 東海
明星 23―15 順天堂
国士館 16―15 東京教大
東京学芸大 14―11 関東学院

▽3部
東京工大 10―9 都立大
千葉工大 15―8 立教
成蹊 25―16 横浜商大
青山学院 24―13 防大

▽4部
東大 24―20 神奈川大
武蔵工大 17―9 茨城大
専修 15―8 千葉大
上智 20―16 千葉商大

▽5部Aブロック
明治学院 不戦勝 東邦
東京経大 20―9 亜細亜
一橋 24―9 東京写真大

▽同Bブロック
独協 19―17 武蔵
東京理科大 不戦勝 東京農工大
日本工業大 16―12 横浜市大

▽女子
東女体大 18（13―1、5―3）4 東京教大
東京学芸大 22（10―2、12―4）6 日女体大

◇第5日（10月9日）

▽3部
青山学院 23―7 立教
成蹊 15―13 都立大
横浜商大 15―10 東京工大
千葉工大 12―9 防大

▽4部
専修 17―8 神奈川大
茨城大 23―13 上智
武蔵工大 27―20 千葉商大
東大 21―11 千葉大

▽5部Aブロック
東京経大 16―15 一橋
東京写真大 不戦勝 東邦

▽同Bブロック
武蔵 21―13 和光
横浜市大 13―12 東京理秋大
日本工業大 20―19 武蔵

◇第6日（10月10日＝1試合）

▽3部
防大 14―13 東京工大

◇第7日（10月12日）

▽1部
早稲田 24（12―8、12―5）13 慶応
中央 26（12―6、14―6）12 明治
日体 18（13―3、5―4）7 日大
法政 20（11―4、9―6）10 芝浦工大

【慶応】

		得
GK	米内	0
FP	福地	7
	木村	0
	西	0
	川崎	1
	西村	1
	浅野	2
	伊牟田	0
	矢島	0
	勝地	2

【早大】

得		
0	山田章	GK
0	阪木	
7	脇若	FP
6	菊池	
4	川畑	
3	山田克	
2	山高	
1	明石	
4	鈴木	
0	泉	
0	甘利	
0	洞ケ瀬	

24（4）7MT（3）13

▽2部
駒沢 15―13 順天堂
東京教大 24―16 関東学院
国士館 15―10 東京学芸大
明星 19―17 東海

▽女子
日体 20（12―1、8―1）2 東京教大

大体大5勝、追う京産大

関西学生リーグ中間速報

関西学生秋季リーグ（男子1部）は9月28日京都市体育館で開幕。

5連勝を目指す大阪体大は危気ない試合ぶりで、すでに5勝（5戦）をマーク、京都産大戦を残すだけとなり、優勝の色を濃くしている。初優勝を狙う京都産大は同志社戦を8―8で引き分け、この半歩の遅れを大阪体大との最終戦で取り戻せるか、興味深い。同志社は、大阪体大戦を6―16で落とし、優勝圏内から退いた。

女子は、甲子園女短大が復調、大阪体大を14―7で破り、3連勝をかけている武庫川女大とも7―7で引き分けた。優勝は武庫川女×大阪体大戦の結果にかかる。

茨城国体速報 大阪3部門に勝つ

第29回国民体育大会ハンドボール競技は、10月21日から25日まで茨城県水海道市で行われ、高校男女と教員は大阪、注目の一般は男子が愛知、女子が茨城の優勝となった。

高校男子で福岡が山口に9―13と敗れる波乱もおきた。（詳報次号）

一般男子

▽1回戦勝者 山口、神奈川、石川、和歌山、茨城、北海道、三重、東京、岐阜、広島、群馬、埼玉、富山、栃木

▽2回戦勝者 愛知、神奈川、和歌山、三重、東京、広島、埼玉、大阪

▽準々決勝勝者 愛知、三重、東京、大阪

▽準決勝
愛知 18―11 三重
大阪 15―11 東京

▽3位決定戦
三重 16―10 東京

▽決勝
愛知 14―6 大阪

一般女子

▽1回戦勝者 山口、栃木、愛知、京都

▽準々決勝勝者 東京、三重、熊本、茨城

▽準決勝
東京 12―9 三重
茨城 9―8 熊本

▽3位決定戦
熊本 16（延）14 三重

▽決勝
茨城 9―5 東京

高校男子

▽1回戦勝者 山口、愛知

▽準々決勝勝者 山口、大阪、北海道、愛知

▽準決勝
大阪 13―11 山口
愛知 6（延）3 北海道

▽3位決定戦
山口 15―7 北海道

▽決勝
大阪 11―7 愛知

高校女子

▽1回戦勝者 広島、秋田

▽準々決勝勝者 大阪、東京、茨城、愛媛

▽準決勝
大阪 10―2 東京
茨城 5―4 愛媛

▽3位決定戦
愛媛 13―6 東京

▽決勝
大阪 5―4 茨城

教員

▽1回戦勝者 福井、岡山

▽準々決勝勝者 大阪、千葉、静岡、茨城

▽準決勝
大阪 21―18 千葉
茨城 14―10 静岡

▽3位決定戦
千葉 17―13 静岡

▽決勝
大阪 16―6 茨城

合織糸・合織混紡糸

田村紡績株式会社

社長 田村正衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 0593－65－2156（代表）
郵便番号　512

東ドイツ戦回顧

(続)「1・2戦の技術評」と今後

渡辺慶寿
(日本協会技術部長)

日本が、ヨーロッパチームを相手にした場合、解決をせまられている課題の一つに、被7MTをいかに少くするかがある。

前号でも触れたように、今回のシリーズで、全日本は4戦通算21本の7MTを課せられ15点を失っている。（ちなみに、今春の世界選手権6戦における日本の7MT失点は23点）。

こうした傾向は、過去数回のヨーロッパ遠征では、あまり反省点として指摘されたことがないのだが、近年、ヨーロッパ勢が、体格の小さい日本ディフェンスを突破する〝戦術〟として、チャージングすれすれのアタックを仕掛けるケースが目立ち、日本の守備者が押しこまれたり、おおいかぶされたりして7MTを課せられるのである。今回の場合は、東ドイツの鋭いカットインプレーを一発で止め切れず課せられたものも多い。

ディフェンス側の体力も少からず影響しており、その疲労度とも関連がありそう。

それだけに、試合のヤマ場に起きやすく、一本の7MTが、日本の攻守に大きな変調を来たす場面も多いのである。

第1戦、第2戦で7MT点を奪われた時のスコアをみてみると、(第1戦)0−0、日本2−5、5−6、9−13。(第2戦)3−3、日本6−7、9−12、9−17、11−17。

といずれも要所であり、最終戦にいたっては14−11のあとと、16−15のあと連続2本である。

次に1、2戦の試合記録から数字で両チームを分析してみよう。

まず、シュート成功率である。

前半の善戦は当然のことながら比率も高い。

		第1戦		第2戦	
		前半	後半	前半	後半
全日本	S	19	21	25	20
	G	6	5	8	5
	%	31.6	23.8	32	25
東独	S	18	22	24	23
	G	8	9	9	13
	%	44.4	40.9	37.5	56.5

ところが後半は、4分の1の成功がやっとで、前半より高率を示す東ドイツとは好対照だ。

7MT同よう、これもスタミナがかかわりあってくる。

日本の後半は「阻止されやすいシュート」が多くなっているわけだからだ。

その点、東ドイツはさすがである。

次に反則とミスについてみてみよう。

反則欄のカッコ内の数字は、それによって7MTを課せられた回数である。

また、ミス数は、パスやキャッチの失敗で相手側にボールが渡った時のみの回数を示した。

	第1戦				第2戦			
	反則		ミス		反則		ミス	
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
日本	13 (3)	15 (3)	3	5	10 (3)	12 (3)	6	2
東独	12 (1)	15	2	2	11	10	3	3

こうして、洗い出してみると、例えば第1戦、反則回数は28（日本）と27（東ドイツ）とほとんど同数ながら7MTにもちこまれてしまった反則は、東ドイツがわずか1回。前述の〝7MT問題〟がいっそうはっきりする。

次は体格である。

	身長(cm)	体重(kg)	ローレル指数
全日本	180.7	76.8	130.3
東独	185.9	84.9	132.3

ローレル指数というのはご承知のとおり、身体の充実度を表わす数値である。

身長では約5cm、体重で約8kg、ローレル指数で2の差である。

今回の全日本は、過去のナショナルチームより、形態面で向上を示しているが、この身体的〝開き〟は、何を物語っているのであろうか。

シュートの確率、7MT……。

全日本は、試合における身体接触の場において、総合的な遅れがうかがえ、今後ハードな体力トレーニングの必要性を示唆しているのだ。

1、2戦だけをみても、前半の善戦ペースを、後半に移行できないことで、いっそうそれを痛感させるのである。

また、東ドイツの攻撃に対して防禦に、担当の精力を費消していることも事実。ガンショウ選手は「全日本は持久性に欠ける」と見抜いており、したがって走る、あるいは動くことに必要な「全身持久性」とともに「局所持久性」すねわちポディアタック的なものであるが、今や日本のハンドボールが世界に飛躍するには、この両面の体力づくりをベースとしてパワーフルな技能に結びつける必要がある。

また技能面では、ムダのない攻撃ハンドボールの理論にあった適確な動きを完全に収得させ、効率のよい攻撃を基準とすべきである。

この上にたって、日本独自のプレーの開発を心掛けるべきであろう。日本的プレーと云えば、例えば多種多様な連続したプレー、す

総合力に決定的な差

～最終戦，健斗はしたが～

小西　博喜

（日本協会技術委員
京都協会理事長）

3連戦の東ドイツに対し、全日本の試合前の表情は、前日に比べてかなり厳しさがうかがわれ、その雰囲気は異様でさえあった。

「なんとか勝ちたい」「勝てる方法はないのか」「最後の試合をいかに戦うのか」――ファンの期待と希望も、選手以上にまたシビアなものであった。

全日本はその意欲をぶつけるように立ちあがりから全日本の当りは激しく、さしもの東ドイツもそのペースを乱され、全日本のリズムを断ち切るのに懸命であった。

先制点は、J・ロストで東ドイツがあげたが、全日本は中井木野の連続ゴールで逆転、その後もつねにリードを奪い前半12―7で折り返す気力を見せた。

大きかったのは12、29分の7MTを佐藤が、ヴァイスに手を出すヒマを与えぬ見事なスピードシュートで決めたことだ。

しかし、問題は後半である。5点のリードを得ながら不安と期待、それは全日本の現状を も云い当てているものであったろう。

東ドイツは、はたして追いあげてきた。

ビーチュに始まり、P・ロスト、ヒルデブラント……。真夏の太陽を思わせるようにじりじりと焼きつくような感じの追撃であった。

さらに、ディフェンスの際、終始声を発しながら、一気にピンチからチャンスをつかもうと強い当りをみせてきたのもこのシリーズ初めてのことだった。

20分、速攻からグルーナーでついに1点差（日本16―15）。

一方、全日本は、しだいに攻めあぐみを感じさせチャンスをつかめず、守りに廻ると、東ドイツの小さなフェイントからのしかかるように攻めこんでくるプレーにゆさぶられた。

必死の防禦は無理が生じる。しかも疲れが重ってのラフプレー。25、27分の7MTはこうしてとられた。

ポイントに立つのは、速射砲ガンショウ。ファンは、それが〝絶望〟を意味させることを知っている。タメ息がもれる中をガンショウはピシッと決めた。16―16そして17―16。

全日本の動きは重く、結局14分間ノーゴール、あと1点で遂に野望を断たれた。やはり、地力の差が表れてしまった。卒直に云うなら「勝利」の遠い「善戦」だった。

総合力の見劣りもはっきりしている。例えば、ディフェンスで中井が前に出ると、中央後部に大きな穴ができ、そこをすかさずポストマン・ラケンマハーにとびこまれフライングシュートを決められる。さもなくば7MTをとられるのだ。

東ドイツは、ケーラート（2m）を除いては、大柄ではなく中型だが、その腕っぷしの強さはすごい。またオールラウンドのペーメ（途中帰国）が、最後まで戦列に加っていたら、あるいはこの日も、大同も、善戦できなかったのではないか。

最終戦後の夜、ザイラー監督は「日本の体育館のむし暑さが最大の敵だった。ペーメを帰したため13人で戦うにしてはハードスケジュールだった」と話し静かにブランデーをのみほした。

なわち空間を利用してのプレーイングを中心として、クイックプレー、カットインプレーのように、相手の意表をつく技能を多くトレーニングの中にとり入れ、ゲーム展開に利用することがあげられよう。

ところで今回のシリーズで全日本は各種角度より、選手の起用を試み得たことは、今後のチーム編成において、より参考となった。

したがってこの大会をむだにすることなく邁進することができるであろう。

東ドイツも、日本遠征でGKのシュミット、長身の若手として将来期待されるグルーナー、身長の巨人ケーラートらの若手を育成させる目的があったと聞いているが、その目的は十分果せられたであろうし、増々世界制覇の目的に向って組織的計画にもとずいてその路線を貫くであろう。

日本ハンドボール界においての選手育成には最良の技能トレーニング、最良の体力トレーニングだけでは完全とはいえない。

選手一人一人の管理も当然必要なことであり、その成果を十分に裏付をする栄養のことも考えなければならない。

その上に立って、真の戦う意志を育成すべきである。

（了）

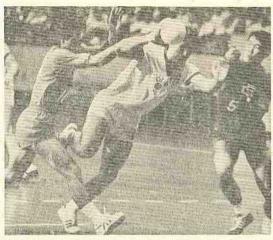
HONDAは無公害時代のパイオニア!!

《世界のホンダ》を支えるホンダイズムとは
フェアプレイを土台にした“先駆者の精神”
です。先人の追従でなく、あくまでも自らの手で
よりよい製品をより早く世に出すこと………それは
究極的にはスポーツ精神と同じ“自分との闘い”です。

本田技研工業㈱鈴鹿製作所
三重県鈴鹿市平田町1907 ☎〈0593〉78-1212 〒513

厚く、深い底刻み、フット・ワーク優先の合理シューズ

- 力のロス、横スベリを解消した合理設計で定評高い斜線模様の特殊モールド底。(パテント出願中)
- 厚く、彫りの深い底、中底はユニークな弾性を誇る二重スポンジ・クッション。
- 表布と裏布を離した袋状アッパーで、快適な足沿い、軽快な履き心地。
- ブルー、金茶のカラー・フルなデザイン。
- 要部に革補強。

ハンドベアー
デラックス〈HX〉●サイズ=22.5～29●ブルー・金茶●¥2,800
●全国有名スポーツ品店、百貨店でお求め下さい。

神戸 **ベアー株式会社** 東京

特集・東ドイツ戦

読者の直言

光る忠実な攻防技術

世界の最上位に立つといわれる東ヨーロッパ勢にあって、東ドイツは極めてユニークな存在ではなかろうか。

私は、昨秋のユーゴに、限りないパワー・ハンドボールを見、さらに数年前のグンメルスバッハクラブにもそれを感じ、ヨーロッパのハンドボールは、一見大味にみえる力のハンドボールを推進しているものと決めこんでいたのだが東ドイツは、そうした概念を改めさせるプレーを示した。

すなわち、ガンショウ、ラケンマハー、ロスト、ピーチュらのテクニックは、正にオーソドックスであり、パワーにたよる影は一つも見られなかったのである。

彼らにしても、日本のテクニシャンとは比べものにならぬ体格をしており、パワーを後立てにしているというみかたもあろうが、セオリーに忠実な攻防戦術は光り、日本にとって、大いに参考となったハズである。

また、ゴールキーパーの忠実なプレーも印象的であった。彼らの好守に、日本は、勝機を封じこめられた、といってよく、また、FPディフェンス陣との連けいの巧さもみごとであった。

巧さに活きようとする日本にとって、東ドイツ来日は、ユーゴ招へい以上に評価されるものであろう。【近藤克人・東京都港区】

洗れんされたディフェンス

第2戦を会場で、その他の3試合をテレビでたんのう。東ドイツの守りのきれいさが印象に残った。世界選手権でフェアプレー賞を受けたというのもうなずけた。

さすがに最終戦は、必死なプレーで、このチームにはめずらしく荒さを見せたが、それもちっとも粗暴には写らなかった。

日本の、特に関東学生リーグなど見に行くと、まったくラフなプレーで、ハンドボールのイメージをダウンさせる。

東ドイツは、その点、洗れんされており、またゴールキーピングの巧さも際立っていた。

守りというものが、ハンドボールのナショナルゲームにいかに作用するかを東ドイツは教えてくれたし、日本各チームも口でいうだけではなく、もういちどディフェンスの重要さというものを考えなおして欲しい。【鈴木英雄・横浜市港北区・会社員】

惜しかった大同製鋼

まったく惜しかった。大同のチームワークは、テレビでみた全日本よりはるかに秀れていたと思うし、最後まで七人で戦い抜いたのもすごい。

東ドイツも、大同の気力に押しまくられた感じで、名古屋で僕はこれまで、ずいぶんハンドボールの試合を見たが、自分から声を出して応援したのは初めてなほど興奮しました。

東ドイツで印象に残ったのは、最後まで落ち着いていたことで、これが世界2位の自信というものかと思った。

それに、全員の得点力が平均しているのも強味で、誰がでてきても、どこからでもポイントがあげられる総合力もすばらしいものでした。

それだけに、苦しめぬいた大同の善戦が光るわけで、かえすがえすも惜しい負けだと思う。

大同が、ここまでやれたのはディフェンスにあったと思うし、速攻を確実に決めたことにある。

全日本が、オリンピックで勝つには、防禦力と速攻だといわれるが、大同戦で私は、そのことを納得しました。

一つのチームが、これまでやるのですからナショナルチームも奮起して下さい。【星名幸彦・名古屋市・高校生】

厚味のある選手層

当然のことながら、日本―東ドイツの差は選手層であった。

それは、彼らが、ひんぱんに行

うメンバーチェンヂでも、どんな時でもいっこうに戦力が落ちず、同レベルで試合をつづけていたことで明きらか。

控えの厚味によって、もはやベテランの境地に入っているガンショウ、ラケンマハーの両エースを休ませながら使えるということにもつながっていた。

GKも、誰が出て来ても同じような力で、そつがなかった。

そこへ行くと日本は、一線、二線の差がありすぎ、最年長プレイヤーの木野を全時間つぎこまなければならないということになってしまう。

前半せりあいながら、後半やられてしまうのは、最近よくいわれるゲームスタミナの問題もあろうが、つまるところは、選手起用を思うにまかせないベンチ力の貧しさということになるのではなかろうか。

また、東ドイツが、ディフェンにまわると無気味なほど静かに、そしてラフなプレーを見せなかったのにも注目させられた。世界第2位を呼んだのだから当りまえだが、世界と日本の差は、まだすべての面ではっきりしすぎていることを思い知らされた。

なお、日本チーム関係者が、マスコミなどで、東ドイツの来日間もない第1戦こそ勝機といっていたのは、フェアではないし、なんとも消極的、情けない話であった

【松井修・東京都渋谷区・自営】

〃勝つため〃の努力を

私は、これまで市単位の連盟でハンドボール人口の拡大に努力して来ましたが、その目的に対し、いま最善の方法はといえば、ナショナルチームが、オリンピックにおいて、かつて日本のサッカーが示した以上（編集部注・日本サッカーはメキシコオリンピックで銅メダル）の実績を残すことだと考えています．

体力のある東ドイツ選手に押され日本のディフェンスは無理な守りから7MTを課せられる

来日の東ドイツは、世界選手権2位の実力を遺憾なく発揮したと同時に日本のハンドボール界に素晴しい贈りものを置いていったような気がしてなりません。

対全日本4戦に対する反響はいろいろあると思いますが、私なりの感想と意見を述べさせていただきます。

日本のハンドボールが、世界のベストエイトの壁を破り、トップフォアに入るためには、今回の4戦の結果を、新たな気持ちで考えなおす必要があると思います。

私は卒直な気持ちで実力差、体力差に優る東ドイツに対し、全日本が勝つためのハンドボールに徹していたのか、どうかを問い直したい気持ちでいっぱいです。

例えば、相手との体格差、体力差を知りながら、あまりにもその攻撃はセットを多用しすぎていた。はたして速攻をどれだけ活用するつもりであったのか、選手たちに、進んで速攻を出させるような指示していたのだろうか、私は疑問を抱く。

セットを組まれたら東ドイツの守りの壁は厚く高い。彼らが安全に帰らないうちに日本は、攻めこみ、攻めたてるべきであり、マークを完全に外して射てなかったとしても、速攻からミドルシュートに継ぐことはできなかったものであろうか。

速攻チャンス、とスタンドでみても、わざわざセットに入るようなシーンさえもあったのである。

世界選手権でフェアプレー賞を得た東ドイツのディフェンスはGK―FPの連けいが実にみごと。(写真は上下とも第1戦，撮影山田真市)

勝っていての余裕ならばとも角全力で活路を開くべき場面で、速攻を仕掛けられない、あるいは仕掛けぬ消極さは、セットのみで、速攻練習に時間をかけていなかったのではないかとさえ思いたくなるほどだった。

もし、全日本が長身者を揃えるがあまり、機敏で鋭い速攻が鈍るようなら問題であろう。

長身であることは、たしかに世界の壁を破る一要素ではあるが、必しも長身ではなくても、素晴しい技能、特に速さと闘志を持っている選手も居るかもしれない。

現在の全日本選手及びコーチが大型化に走りすぎ、選ばれた選手たちがかつてヨーロッパ勢を驚ろかせた〃速さの基本〃を満足にできず、しかもそれを理由にされる様な負けかたをしたとしたら、身長差だけで選ばれなかった在野の

実力者らに対しても自分自身にも悔いが残ることになると思います。

ナショナルチームに選ばれた皆さんは、モントリオールオリンピックで良い成績を上げ、後を継ぐ後輩に指導をし、ハンドボールを依り発展させて行くと言う重大な責任があるのです。そのためにも、後輩に恥ずかしくない試合ができる様、強い信念と自信を持って、新たな気持ちで練習に励んで頂きたいものです。【石井国夫・大阪堺市（雪陵ク所属）】

課題はスタミナと守り

私は生まれてはじめての国際試合を見に東京体育館へ行った（8月31日）。天気はあまりよくなかったが、ハンドボールとしてはかなりたくさんの人が見に来ていた。

でも、まだまだ少なすぎる。だから盛りあがりもいまひとつ足らないような気がする。

初めて国際試合を見るので前日から興奮してしまったが、残念ながら試合は負け。

テレビ中継も、そのあと3試合（対全日本）を全部見たが、私が行った日を含めて、後半になると疲れてしまうのか、動きが悪くなりミスも多いような感じがする。

日本では、藤中、佐藤のシュート力や、スカイプレーなど多彩な攻撃を示したが、終局1勝も出来なかった。最終戦は、いちち5点もリードしながら終盤固くなったのか鋭さを欠き、じりじり追い上げられて逆転負け。ほんとうに惜しい試合だった。しかし、東ドイツは「強い」と改めて思った。冷静で、しかも、驚くほど強引である。

日本のディフェンスが少しでも甘くなると、すぐにシュートを決めるところなど感心する。特にガンショウは、印象に強く残っている。

日本の課題は、スタミナ、ディフェンスの甘さ、国際キャリアの不足である。日本が外国と試合することの少なさは、地理的なものもあるが悲しいことである。

技術ももちろん大切だと思うがまず数多い経験がなによりも自分たちの力となるのは疑う余地もない。私も試合がある時は必ずその会場へ行きたいと思っている。

もっとも、日本でもハンドボールが盛んになれば、国際試合も多くできるようになると思う。

ディフェンスの強化は、以前からいわれていることだが、なかなか難しそうだ。スタミナにも関係するが、この問題が解決した時は世界のベストエイトに入る夢が実現される時だろう。

競技面からはなれて、テレビで4試合も中継されたことは、今までにも例がないしとても嬉しい。日本のハンドボールの前途はだんだん明るくなってきている。

攻撃には、見るべきものがあるし、それが伝統でもあるのだ。欠点をなおすことはもちろんだが、長所はどんどん伸ばして、モントリオールに向かって頑張って下さい。【青木敬子・東京国立市】

すべてに反省が必要

1、2戦を各千円の入場料を払って見たが、試合開始前の1時間近く、全日本のだらだらした練習を見せられ、あきてしまった。

親善試合だからとはいえレフエリングにも疑問を残し、納得できないシーンが二、三度あった。過去の試合にも二人の審判員の判定の相違する時がたまたまある。国際試合を担当する以上、もっと勉強、研究してもらいたい。

ベンチワークにも一言。各チームのスタープレイヤーを集めてコーチ陣は何を指導しているのか。下手くそ、といいたい。あれでは選手が可愛想だ。また若手の起用も判るが、例えばGKなど、本田の控えに選んだ程度の選手なら高校界にも居るだろうし、彼一人を選ぶなど、選考の視野の狭さはなっとくできない。

大同製鋼は1点差の善戦、単独でもここまでやれるのに、全日本がなぜ勝てぬのか。

ハンドボール普及の途上でこのような試合を何時までやっていたのでは一般にアピールするどころか、マイナスだ。

館内の運営もうひとつ不親切だし、日本協会執行部は派閥にとらわれず、明朗にして熱心なスタッフで編成、頑張ってもらいたい。

【田村満太郎・東京都中野区】

有力な若手の発掘を

昨年のユーゴ、今回の東ドイツ。日本協会が思い切って強い相手を選び、世界最高のハンドボール技術を一般に見せようとしたプランをまず賞したい。

しかし、それにしては全日本はあまりにも非力ではなかったか。

いぜん、木野であり、藤中であり、本田だ。若手はいないのか、それとも探さないのか。

一方、東ドイツは、思い切って若手を使い、ベテランの味を巧みに活かしている。

思ったより、点差は開かず、特に最終戦は1点差、単独の大同も1点差は、レベルアップとみてよいのかも知れぬが、専門家が見たら、内容はワンサイドで東ドイツのものだ。

せっかく、世界超一流のチームを呼ぶのなら、その技を引き出させる努力を全日本はすべきだ。

つまり〝必死の善戦〟を見せて欲しいのである。

モントリオールまであと2年とか聞く。アジアだけで勝つことに満足するな、世界を目指せ。極言すれば、底辺の拡大などあとまわしでいい。若く強い人出でよ、若くすごい人出でよ。

【境井昌二・横浜市磯子区】

よかったTV4中継

▽よかったこと①日本が思ったより大差をつけられず、特に大同、全日本の京都戦が1点差ですんだこと②日本に若手のスターが生まれはじめようとしていること③東ドイツが長身者でただ射ちこんでくるだけのチームではなく、多彩なオフェンスをもったチームであったこと④テレビの中継が4試合ともあったこと（結果論かもしれませんが大同戦も見たかった）

▽残念だったこと①東京大会が大阪などよりファンが少なかったようなこと②試合前の全日本がだらだらしていたこと③野田選手が大同ではプレーしているのに、全日本から引退してしまったような感じのこと④東ドイツの2m選手ケーラートが不調に見受けられたこと。

【S・M生・東京】

東ドイツ戦関係の特集は今号で打ち切ります。多くの読者から原稿が寄せられましたことに感謝しています。（編集部）

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

海外トピックス

杉山　茂
（NHK運動部）

東ドイツ・快調の出足

～バルティック・カップ～

室内シーズン開幕を飾る第7回バルティック・カップトーナメントは9月24日から5日間、カットヴイツ（ポーランド）で行われ、有力5ケ国6チームが激しいせりあいを演じた結果、日本帰りの東ドイツがソビエトと引き分けた以外は、実力通りの試合運びで4勝をマーク、第2回、第3回大会につづき3度目の優勝を飾った。

東ドイツは、日本遠征のメンバーがそっくり参加、故障していたペーメも元気な姿を見せた。

各国の顔ぶれは、今春の世界選手権とあまり変っていないが、ソビエト、西ドイツが若返りを見せはじめている。

チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
ソビエト	18	12－5	6－8	13	スウェーデン
ポーランド	31	18－3	13－8	11	ポーランドB
東ドイツ	14	7－6	7－5	11	西ドイツ
東ドイツ	22	10－9	12－9	18	スウェーデン
ソビエト	15	8－5	7－9	14	ポーランドB
西ドイツ	19	10－8	9－10	18	ポーランド
ソビエト	21	12－6	9－7	13	西ドイツ
スウェーデン	22	11－10	11－6	16	ポーランドB
東ドイツ	16	5－9	11－6	15	ポーランド
ポーランド	22	9－14	13－4	18	スウェーデン
東ドイツ	20	10－10	10－10	20	ソビエト（引き分け）
西ドイツ	20	9－8	11－10	18	ポーランドB
西ドイツ	21	10－7	11－6	13	スウェーデン
東ドイツ	25	15－8	10－8	16	ポーランドB
ポーランド	17	9－11	8－4	15	ソビエト

【順位】①東ドイツ4勝1敗②ソビエト3勝1敗1分③ポーランド④西ドイツ⑤スウェーデン⑥ポーランドB

得点王は29ゴールをあげたプリビス（ポーランドB）。

各国の最高得点者はラケンマハー（東ドイツ）22、チカライエフ（ソビエト）18、クレンペル（ポーランド）22、デッカーム（西ドイツ）17、オルソン（スウェーデン、昭46来日）16だった。

地元ハンガリーが優勝

～サマー・トーナメント～

ハンガリーが夏の終りを告げる国際屋外トーナメントを企画、9月なかば4カ国リーグを開き、3日間で一万人のファンを動員、しかも地元ハンガリーが優勝を飾り、スタンドを大いに湧かせた。

東ドイツは、主力が日本に派遣されておりBチームが出場。

チーム	スコア	チーム
ユーゴ	21－16	チェコ
ハンガリー	21－10	東ドイツB
ハンガリー	19－15	チェコ
東ドイツB	21－19	チェコ
ハンガリー	19－13	ユーゴ

ユーゴ×東ドイツBは途中降雨で中止。（ノーゲーム）

【順位】①ハンガリー②ユーゴ③東ドイツB④チェコ

ソビエト・ユーゴ破る

～ウクライナ女子国際～

ウクライナ女子国際トーナメントが9月、6カ国の参加で行われソビエトが5戦全勝で優勝を飾った。

出場したのは世界チャンピオンのユーゴを始め、東欧上位国と西ドイツだが、ユーゴがやや精彩を欠いたのに比べ、ソビエトは波にのった攻守で勝ち進んだ。

チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
東ドイツ	21	10－2	11－3	5	ブルガリア
ユーゴ	12	6－6	6－4	10	ソビエト若手
ソビエト	20	11－5	9－2	7	西ドイツ
ソビエト若手	19	6－6	13－9	15	西ドイツ
ユーゴ	22	9－4	13－5	9	ブルガリア
ソビエト	14	6－6	8－6	12	東ドイツ
東ドイツ	14	8－6	6－6	12	ソビエト若手
ユーゴ	16	7－9	9－2	11	西ドイツ
ソビエト	15	3－8	12－3	11	ブルガリア
ソビエト	22	9－8	13－5	13	ソビエト若手
西ドイツ	15	9－9	6－4	13	ブルガリア
東ドイツ	13	7－4	6－7	11	ユーゴ
ソビエト若手	21	12－8	9－7	15	ブルガリア
東ドイツ	19	9－6	10－6	12	西ドイツ
ソビエト	15	8－4	7－3	7	ユーゴ

【順位】①ソビエト②東ドイツ③ユーゴ④ソビエト若手⑤西ドイツ⑥

得点王はソビエト若手のアウラムで34ゴール。

各国の最高得点者はリトスチェンコ（ソビエト）20、クレッシュマール（東ドイツ）32、ルキック（ユーゴ）24、V・キント（西ドイツ）13、カサコーワ（ブルガリア）20。

モスクワに決まる

—1980年の五輪—

確実なハンドボール実施

【速報】10月22日からウイーン（オーストリア）で開かれている第75回IOC（国際オリンピック委員会）総会は、23日の会議で、一九八〇年の第22回オリンピック大会～夏季大会～の開催地にモスクワ市（ソビエト）を決めた。

この大会の開催地としては、モスクワのほか、ロスアンゼルス市（アメリカ）が立候補していたが投票の結果、モスクワに決まったものだ。

モスクワ・オリンピックでは、ハンドボール（男女）の実施が確実視されており、IHF（国際ハンドボール連盟）も10月の通常総会で「モスクワ支持」を議決していた。社会主義国でオリンピック開がかれるのは、史上初めてのこと。会期は、早くも一九八〇年（昭55）の8月10日から15日間と発表されている。

ブルガリア

（お詫び）本誌123号でこの大会がユーゴで開かれるように報じたのは誤りでした。

新ＬＬ砲快調　西ドイツ全国リーグが開幕したが、今シーズンファンの関心を集めているのは、いわば3部ともいえるウエストファーレン地域上部リーグ所属のＴＵＳ・ネッテルスステットの試合ぶりだ。

今なお圧倒的人気を誇るルブキングのほか、本誌既報のようにユーゴの星・ラザレビッチを迎え、さらに全国リーグの強豪ヴェリングホーヘンのポイントゲッター、ゴゼヴインケルまで引き入れたのだからすごい。

ルブキング、ラザレビッチの新ＬＬ砲はヨーロッパでも有数の強力コンビで、先日もスウェーデンの名門、ヘラス・ストックフォルムを32―21でねじふせている。

ネッテルスステットが、全国リーグ入りするのは、早くても明後年である。

カナダが西独遠征　モントリオールオリンピック（昭51）に備えて強化を企るカナダは、このほど男子ナショナルチームを西ドイツへ送りこみ、各地を転戦させているが、ＧＷ・ダンケルセンに26―13で敗れたほか、成績はあまりパッとしていない。

チュニジアが優勝　初のアフリカ選手権が、10月4日からチュニジアで行われ、チュニジアが優勝、2位はカメルーン、3位はセネガルだった。女子はチュニジア、セネガル、ウガンダの順。

ヨーロッパ・カップ開幕

ヨーロッパ各国のチャンピオン（先シーズン）による恒例のビッグエベント"ヨーロッパ・カップ"が、10月4日の男子第1ラウンドで幕をあけた。

これから延々と来春4月まで、各国各地を沸かせるこのトーナメントも男子は第15回、女子は第14回、いまやヨーロッパスポーツ界のメインエベントの一つである。有力チームをさぐり出してみよう。

◇男子、史上初めてイギリスが代表（ブレントウッドＨＣ）を送ったほか、久々にルーマニア（ステアウア・ブカレスト）も出場、25ケ国（史上3度目）のチャンピオンによって争われる。

例年どおり、ラウンド毎に組み合わせの抽せんが行われるため、優勝チームを予想するのは難しいのだが、やはり中心はグンメルスバッハ（西ドイツ、昨年度優勝）。シュミット（32才）が頑張っているほかブラント、ベステベ、カーター（ＧＫ）らの来日組、それに今季は有望な若手を2軍からかなり繰り入れている。

打倒グンメルスバッハに闘志を燃やすのはビルトランを擁するステアウア・ブカレストをはじめ、マキシモフのＭＡＩモスクワ（ソビエト）、アルスラナジッチのボラック・バンヤルカ（ユーゴ）、エンゲル、ピーチュらのＡＳＫＶ・フランクフルト（東ドイツ）、来春来日を噂されるスコダ・ピルゼン（チェコ）らの東欧勢だろう。

ダークホース群にはロコモテイブ・ソフィア（ブルガリア）、スパルタカス・ブダペスト（ハンガリー）、ＲＩＬ・オスロ（ノルウエー）、バロンマノス・グラノラース（スペイン）らがあげられる。グラノラースは来春日本遠征を計画しているチームだ。

このほかではＫＦＵＭ・アーハス（デンマーク）、ザーブ・リンコピング（スウェーデン）の北欧勢が上位を狙っている。

なお、今年もイスラエル（ハポエル・レコボット）が、この大会へ代表を出している。

◇女子　16カ国が参加、昨年はスパルタク・キエフ（ソビエト）の5連勝が阻止される波乱となり、ファンを熱狂させたが、キエフを破った女王・ＳＣライプチヒ（東ドイツ）は出場を辞退（理由不明）している。

雪じょくを期していたキエフは拍子抜け、と伝えられるが、優勝争いに一歩前進した感じ。キエフを追うのはロコモテイブ・ザグレブ（ユーゴ）、ＴＪ・ゴットワルドウ（チェコ）、ＳＣ・ブダペスト（ハンガリー）、ＩＦＦＳ・ブカレスト（ルーマニア）だろう。

男子以上に東欧有利で、この一角を崩す"西側"の期待は、バイエル・レバクーゼン（西ドイツ）、ＩＬ・ヴエスター・オスロ（ノルウエー）ぐらいのもの。それもクジ運しだいだ。

男子同ようイスラエルからハポエル・ラアナマが送られているのが注目される。

日韓社会人延びる　全日本実連は、11月に予定していた第4回日韓男子社会人交流をいちぢ延期することに決め、韓国協会の了解を求めた。

ＩＨＦコーチ会議　4年に一度開かれるＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）コーチシンポジウムは9月16日から21日までスイスのマグリンゲンで開かれ、30ケ国から各ナショナルチームコーチ53名が参集した。日本からは東嘉伸全日本男子コーチと、ＩＨＦの推せんを受けた竹野奉昭（全日本男子監督）の両氏が出席した。

日本のハンドボールを世界の最高峰へ！

（協賛者御芳名・順不同）

各地の記録

女子は守山女高勝つ

▼滋賀県民体育大会ハンドボール競技（8月・高島郡今津東）

▽高校男子準々決勝
八幡工 14—6 彦根東
彦根工 13—11 能登川
高島 7—5 米原
安曇川 10—5 長浜商工

▽同準決勝
高島 11—6 安曇工
八幡工 20—7 彦根工

▽同決勝
八幡工 14（8—3 6—2）5 高島

▽同女子準々決勝
彦根西 20—7 愛知
安曇川 8—5 能登川
高島 7—2 彦根東
守山女 18—5 大商

▽同準決勝
彦根西 9—4 安曇川
守山女 14—6 高島

▽同決勝
守山女 8（4—3 4—4）7 彦根西

▽一般郡市対抗（男子のみ）1回戦
守山市 19—11 大津市
彦根市B 18—4 草津市
高島郡 18—12 栗太郡

▽同準決勝
守山市 12—6 彦根市
高島郡 15—9 彦根市B

▽同決勝
守山市 8（3—4 5—3）7 高島郡

久留米工、貫録示す

▼第12回久留米市（福岡）選手権（9月・久留米工）

▽一般男子1回戦（1試合）
久留米工ク 31—8 幹部候補生学校

▽同準決勝
ブリヂストンタイヤ 23—14 久留米ク
久留米工ク 34—13 西南ク

▽同決勝
久留米工ク 23—17 ブリヂストンタイヤ

▽同女子決勝
明善ク 12—9 久留米市高校選抜

▽高校男子1回戦（1試合）
明善 10—7 三池

▽同準決勝
日田商 30—3 南筑
久留米工 20—4 明善

▽同決勝
久留米工 23—18 日田商

▽同女子決勝
明善 8—6 浮羽

弘前南高初の栄冠

▼第10回川島杯争奪青森県選手権（8月・青森東高）

▽高校男子準々決勝
青森商 14—9 鰺ケ沢
七戸 15—11 青森東
青森 11—9 三本木
弘前南 15—9 野辺地

▽同準決勝
弘前南 13—9 青森商
青森 13—11 七戸

▽同決勝
弘前南 14（6—1 8—3）4 青森

弘前南高は初優勝

▽同女子1回戦（1試合）
七戸 10—5 柏木農

▽同準決勝
野辺地 8—6 三本木
青森西 8—2 七戸

▽同決勝
青森西 18（10—1 8—3）4 野辺地

青森西高は5連勝

▽一般男子決勝ラウンド・5～6位決定戦
青森ク 25—8 合浦送球会

▽同3～4位決定戦
うみねこク 18（11—5 7—5）10 青森教員

▽同決勝戦
七戸ユニオン 29（16—4 13—6）10 三本木高OB

▽女子オープン
あすなろク 8—7 青森西高

大垣農と岐阜南勝つ

▼岐阜県高校総体ハンドボール競技（8月・市岐阜商ほか）

▽男子準々決勝
大垣農 22—5 岐阜東
岐阜北 7—5 加納
不破 12—3 岐阜南
市岐阜商 11—9 県岐阜商

▽同準決勝
市岐阜商 17—15 不破
大垣農 18—8 岐阜北

▽同決勝
大垣農 17（6—7 11—7）14 市岐阜商

▽女子準々決勝
岐阜南 13—1 大垣
県岐阜商 12—6 養老女商
富田女 7—5 益田
加納 7—6 高山

▽同準決勝
岐阜南 8—7 県岐阜商
加納 12—7 富田女

▽同決勝
岐阜南 15（7—2 8—2）4 加納

（この項「岐阜・はんどぼうる通信」6号から）

興南5年ぶりの首位

▼第11回沖縄県高校選手権（10月浦添高）

▽男子準々決勝
豊見城 10—8 糸満
前原 15—11 真和志
興南 11—7 コザ
沖縄工 16—4 浦添

▽同準決勝
沖縄工 18—14 興南
豊見城 18—8 前原

▽同決勝
沖縄工 14（8—5 6—4）9 豊見城

沖縄工は初優勝

▽女子準々決勝
小禄 12―2 中部商
興南 17―8 読谷
北山 9―5 コザ
那覇商 10―5 豊見城
▽同準決勝
興南 6―4 小禄
那覇商 9―8 北山
▽同決勝
興南 12（7―3 5―0）3 那覇商
興南高は5年ぶり2度目の優勝

一般は沖縄と那覇

▼第27回沖縄県民体育大会ハンドボール競技（9月・沖縄国際大体育館）＝郡市対抗
▽男子1回戦（1試合）
那覇 34―27 八重山
▽同準決勝
沖縄 34―17 宮古
那覇 25―10 島尻
▽同3位決定戦
島尻 24―16 宮古
▽同決勝
沖縄 23―19 那覇
▽女子決勝
那覇 21―10 島尻

「高校生の自主大会」開く

▼東京・杉並区高校選手権（9月 杉並高ほか）
▽男子1次戦（3試合）
杉並工 13―10 日大二
杉並 14―8 西
豊多摩 11―7 桜水商
▽同敗者戦1回戦
西 12―7 桜水商
▽同2回戦
西 24―3 日大二
▽同決勝トーナメント1回戦
杉並 12―8 杉並工
西 14―12 豊多摩
▽同決勝
杉並 21―10 西
▽女子1次戦（1試合）
菊華 3―2 杉並
▽同2次戦
桜水商 不戦勝 東京立正
西 11―3 豊多摩
菊華 2―1 日大二
▽同決勝トーナメント1回戦
桜水商 9―2 西
日大二（敗者戦勝者） 4（分）4 菊華
7MTコンテストで日大二の勝
▽同決勝
桜水商 17―1 日大二

賑やかになった一般男子

▼第22回栃木県総合選手権（9月 国学院高）
▽男子準々決勝
栃木教員 28―9 矢板中央高
馬頭高 19―14 国学院栃木高
AOK栃木 31―6 烏山高
柿の実ク 21―9 日立栃木
▽同準決勝
栃木教員 17―12 馬頭高
AOK栃木 21―13 柿の実ク
▽同3位決定戦
柿の実ク 13―11 馬頭高
▽同決勝
AOK栃木 19（9―4 10―8）12 栃木教員
〇……高校OBが主体だった一般男子に、日立栃木、ブリヂストンタイヤ、自治医大、陸上自衛隊など新設チームが登場、多彩な顔ぶれになった。こうした成人チームにはさまれながら馬頭高新人が3位へ食いこんだ健斗が光る。（Y）
▽女子準々決勝
小山城南高B 10―7 国学院栃木B
日立栃木 30―6 国学院栃木高
小山城南高 15―4 栃木女高
佐野女高 6（分）6 栃木女高B
7MTコンテストで佐野の勝ち
▽同準決勝
日立栃木 18―7 小山城南高B
小山城南高 10―5 佐野女高
▽同3位決定戦
佐野女高 11―6 小山城南高B
▽同決勝
日立栃木 15（6―2 9―0）2 小山城南高

知事杯も三菱レ大竹に

▼第16回広島県知事杯争奪トーナメント（10月・江田島）＝男子のみ
▽準々決勝
三菱レ大竹 21―5 修道7
日本発条広島 24―7 呉高専
IHI呉 19―9 菊翔会
第1術科校 14―7 日本製鋼
▽準決勝
三菱レ大竹 26―4 日本発条広島
IHI呉 17―11 第1術科校
▽決勝
三菱レイヨン大竹 27（12―3 15―1）4 IHI呉

山梨市、男女優勝は成らず

▼第27回山梨県体育祭りハンドボール競技（9月・塩山中）＝郡市対抗
▽男子準々決勝
塩山 13―7 富士吉田
甲府 11―9 大月
山梨 12―7 中巨摩
東山梨 17―9 東八代
▽同準決勝
山梨 13―9 甲府
塩山 15―7 東山梨
▽同決勝
山梨 11（6―2 5―5）7 塩山
▽女子1回戦（2試合）
富士吉田 9―7 塩山
東山梨 10―7 甲府
▽同準決勝
山梨 20―5 富士吉田
東八代 6―4 東山梨
▽同決勝
東八代 8（4―3 4―3）6 山梨

▼愛知県女子実業団リーグ（9月・名古屋市体育館）＝2回戦制

プラザー工業 21―2 伏原紡織
プラザー工業 17―2 豊田工機
伏原紡織 10―9 豊田工機
プラザー工業 9―2 豊田工機
伏原紡織 7―6 豊田工機
プラザー工業 26―3 伏原紡織

【順位】①プラザー工業 ②伏原紡織 ③豊田工機

▼茨城県一般秋季選手権（9月・勝田自衛隊）＝男子のみ

▽準々決勝
自衛隊勝田 22―10 東海OLDS
茨城大 16―7 新治ク
茨城教員 16―6 鹿島石油
原研ク 16―15 施設校

▽準決勝
自衛隊勝田 21―15 茨城大
茨城教員 24―9 原研ク

▽3位決定戦
茨城大 15―8 原研ク

▽決勝
茨城教員 26（13―5、13―8）13 自衛隊勝田

▼奈良県高校総体ハンドボール競技（9月・添上高）

▽男子準々決勝
正強 6―5 生駒
畝傍 22―8 郡山
添上 12―5 奈良
榛原 34―10 橿原学院

▽同準決勝
添上 22―16 榛原
畝傍 14―4 正強

▽同決勝
添上 12（8―5、5―5）10 畝傍

▽同準々決勝
生駒 12―5 郡山
添上 9―4 桜井商
十津川 17―0 榛原
一条 23―6 短大附

▽同準決勝
添上 9―4 生駒
一条 14―5 十津川

▽同決勝
添上 8（6―3、2―2）5 一条

中学大会記録

◇山梨・第27回県体育祭り中学の部（10月、塩山中）

▽男子準々決勝
山梨北 10―9 甲府北東
塩山 14―6 押原
山梨南 23―13 一宮
山梨大附 19―4 忍野

▽同準決勝
山梨北 14―9 塩山
山梨大附 11―6 山梨南

▽同決勝
山梨北 15（6―5、9―4）9 山梨大附

巡回地方講習会の開催を

機関誌前号の全国教員養成大学研修会参加生の感想文にも述べられているが、中央、地方とのレベル差、判定思想の統一・浸透などを企るため、是非、日本協会主催による巡回地方講習会を実施して欲しい。

こうした企画は、手数がかかるため、地方協会もなかなか立てないようだが、それでは何時までも〃地域差〃は解消しない

かって行った全日本チームのサーキットと滞同して、技術部審判部員が地方に赴いてくれればいっそうよい。

日本協会側も、経費はかさむだろうが、普及々々と口ばかり

投書欄 明日への提言

ではなく、まず実践すべきだ。

参加者の費用は、参加者側負担とすれば、そう予算を食うとは思わない。

地方の指導者、愛好者が今もっとも欲しているのは〃中央の技術〃であり〃中央の考えかた〃である。

登録費や、協賛金は中央、地方一律だが、〃還元〃となると地方にろうすすぎないか、という声も少くないのである。

オリンピック対策で本部の多忙も理解しないではないが、地方講習会を新規事業として是非来年度から組みこむことを考えて下さい。【一地方協会役員＝匿名希望】

▽女子1回戦（2試合）
塩山 12―2 甲府北東
一宮 11―3 山梨大附

▽同準決勝
山梨南 6―3 塩山
一宮 15―6 甲府南

▽同決勝
一宮 10（6―1、4―2）3 山梨南

大学定期戦

第22回早慶定期戦は9月22日東京・早大記念会堂で千人の観衆を集めて行われ、地力にまさる早稲田が立ちあがりから慶応を圧倒、8連勝を飾った。通算成績は早稲田の14勝7敗1引分

早稲田 27（12―6、15―8）14 慶応

▽超OB戦
稲門ク（早）11―10 三田ク（慶）

▽OB戦
稲門ク 26―21 三田ク

高校定期戦

昭和18年以来の伝統を誇る第32回天王寺高×北野高（ともに大阪）の定期戦は9月23日天王寺高で行われ史上2度目の引き分けとなった

両校とも昭和15年創部という古い球史をもち、これで通算成績は北野18勝、天王寺12勝（2分）。

天王寺 12（5―7、7―5）12 北野

▽OB戦
天王寺OB 13―11 北野OB

編集後記

□……ここ二～三カ月、日本協会は、いくつもの国際問題に直面。執行部はかつてない緊張につつまれ、このムード、モントリオール終了までは持ちこまれそうな気配である。

□……この機に、日本協会規約が全面改正され、新たに代議員制度の採用を決めた。

代議員の人たちが、どこまで執行部の苦悩する問題を解決するか、大いに期待がかけられるし、代議員にはそれだけの〃器量〃を望みたいと思う。

□……関東学生リーグのスタンド（駒沢）で、それとなく聞いていると、関係者、愛好者のかたがたが、ハンドボール界の動向をよく知っていられることに驚いた。

その何分の一かが、本誌からの情報と知って、編集子は大変嬉しく思ったものです。

□……先月号でお報せしたバックナンバー（50号まで）の整理、予想外の反響となり、近くお問合せの皆さまに、返信いたしますので、しばらくお待ち下さい。

□……宿願の「日本ハンドボール史」編さんに取りかかる予定いずれ皆様のご協力を要請するつもりです。（S・S）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一二五号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十九年十月二十五日印刷 昭和四十九年十一月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東[illegible]渋谷区神南一－一－一
電話 大代表(467)三一二一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百五十円
(年間購読料二千三百円)